

CREATURE
MIXING
mnfikmyhk

キミが何かを決めるのは、
キミじゃない、
ボクだよ

川鵜鶏肋

春屋アロツ

Lagado

Fukapon

なぎ

真夜中の君

とゆーテーマで何か作って

next
GOGATSU 2011
参加者募集中
www.projectkaigo.org

mnfikmyhk
CREATURE MIXING 6
potato

2010年11月14日 初 版 発 行

発行所 まにふいくみやはか
<http://www.projectkaigo.org/>

印刷／製本 project KAIGO

Copyright © 2010 春屋アロツ, 川鵜鶏肋, Lagado, Fukapon, なぎ,
まにふいくみやはか

この本は Creative Commons「表示 2.1 日本」ライセンスに従い頒布されます。
詳細は <http://creativecommons.org/licenses/by/2.1/jp/> をご覧ください。

CONTENTS

Endless luncheon	川鵜鶏肋	02
Afterschool ceremony	川鵜鶏肋	09
Must be Happy	川鵜鶏肋	27
全割れ？	Lagado	57
フライドポテトを食べながら	春屋アロツ	58
それは呪いのお人形？	Fukapon	63
Potato as material of miso soup	なぎ	73
デザートはポテトパイ		74

poteto mnfikmyhk
CREATURE MIXING 6

Endless luncheon 川鶉鶏肋

「ここ座って」

「はい」

詩紀ちゃんは今午前の授業が終わるやいなや、いつもながらの有無を言わない命令口調でもって僕を屋上に引っ張ってきた。

コンクリート床に敷かれたブルーシートが、見るからに殺風景。

「あのー」

「ん」

仁王立ちの詩紀ちゃんの手にはずらりと長い包丁。マグロ解体できそうなやつ。

制服のアースブラウンのジャケットは既に脱がれており、ド派手な銀髪は一本お下げにくくって、袖まくりという出で立ち。

「えーと」

僕の目の前に置かれたミニテーブルには半紙とか敷いてある。

もしかして、僕、介錯されるんでしょうか。

詩紀ちゃんの背後のどかいポリバケツがものすごく気になるんですが。

あるいは解体かもしれない。

「活きのよさ保証つき」

ああ、確かにまだ生きてるよね。もう長くはなさそうだけど。見た目で感情が読みにくい彼女だが、包丁を手にはそこはかとなく嬉しそうな雰囲気を使っている。

詩紀ちゃんはいささかエキセントリックな方とはいえ、こいつは一介の学生の奇行としちゃちょっと行き過ぎだ。

この間のアレに比べれば地味なものだけれども、僕にとつての危険はあのとときと比べても格段に高い。

なぜなら惚れた弱みというやつで。詩紀ちゃんが死ぬといえは僕は死ぬしかないわけ。

「ナナ、お手」

「はい」

見た目通りにすべすべでやわらかいなー、詩紀ちゃんの手。

「おかわり」

「はい」

こんな具合。彼女には逆らえない。

同時に、詩紀ちゃんが望むなら僕は絶対に死なない。それこそ解体されても死ぬことはないだろうと確信している。

彼女のあんな顔を見るぐらいなら。あんな事を言わせるぐらいなら。

痛いのは嫌だけど、それが詩紀ちゃんの心の平穏に繋がるのなら、僕は喜んで解体されるとしよう。

「芸ができたから。ご褒美をあげないでもないわ」

「いつでも」

瞑目して合掌。

風にさらされる首筋が気になるなあ。床屋行っておけばよかった。

今夜のデザートは、何？

川鵜鶏肋

今回は旧作「珠坂の女神」「Red Cross Black Maiden」の外伝と完全新作一本、計三本立ての暴挙です。世界観はすべて同じなのですが、掲載順に読んでいただくと少しは分かりますかもしれない。

春屋アロツ

今回は急に方向転換をしたせいでバタバタ入稿でした。書こうと思っていたことが、ほんのわずかでも読んでいただいた方に伝わればいいのですが……。

<http://third.system.cx/>

Fukapon

来年がんばります。来年こそがんばります。最近姉重視っばいけど妹がんばります。その前に冬コミかぁ。衣装がんばります……。

<http://www.fukapon.com/>

なぎ

自分のポテトについての思い出と、最近気になっているものを混ぜたらなんだか良くわからない自分語りになってました。百合のつもりなんです全然なってないですね。

前回にも増して実際に書き始める時間が遅くなっています。今回は締め切りの2時間くらい前から作業開始、当然のごとく締め切りオーバーラン。そういえば前回のコメントで書いた試験は落ちてました。なにもかも中途半端すぎますね。

レイアウト

24時から開始して、トラブルなしでも28時は過ぎちゃいますねえ。

印刷・製本

レイアウトと印刷・製本は分けるべき。寝る時間がゼロになるから。

<http://www.projectkaigo.org/>

気持ちにはわかるよ大石さん。

「あら楽しいは晴るる身は捨つる……」

「ふうん？ いい覚悟ね」

じゃぶっ。

「は？」

次の瞬間には白刃が空を切り、という予想に反し、聞こえてきたのは水音。

目を開けてみれば、詩紀ちゃんがポリバケツに片腕を突っ込んでいる。

彼女がつかみ出したのは一尺五寸はあろうかという立派な鯛。

口はばくばくしてるけど暴れたり跳ねたりはせず大人しいもの。

借りてきた鯛？ 状態。

そしてすぐにまな板の上の鯛に。

ざっくり。

いかにも扱いにくそうな長包丁がひらひらと閃くや、哀れ鯛君

(鯛ちゃん?) あれよあれよという間にバラバラに。

素人料理の域を遙かに超えた、いかにも熟練者の手さばき。

目の前で繰り広げられる息をもつかせぬ神業に、僕は啞然とするほかになく。

数分の後には、刺身の大皿が前に置かれていた。

ああなるほど。

今朝、初さんが弁当渡してくれなかったのはこういう事か。

と納得すると同時に、心の底からの尊敬を込めて拍手。

「凄い、詩紀ちゃん! そんな技持ってるなんて思わなかった」

「べつに凄くなんてない。十年以上もこればかりやってれば身につかないことないわ」

謙遜してるが顔が赤い。まんざらじゃなさそう。

「十年!? 板前さん志望なの?」

想像してみた。正直似合わないと思う。

「そうじゃなくて……大事な、幼なじみに、おかしなものの食べさせられないでしょう。やっと人前に出せる腕になったのよ」

始めたのは小学校入るから入らないかの頃からってことになるから気の長い話だ。しかも相手は素人なわけで、完璧主義にしてもいささか行き過ぎな感はあるけど。

「僕のためにそんなに? 感激だなあ」

「ナナのためってわけではないから。あくまでも実験台。これで大丈夫なら兄さん達に食べてもらうつもり」

「それでも光栄だよ。最初に食べさせる相手に選んでくれたんだから」

最大限に喜びを伝えたというのに、詩紀ちゃんは形のいい眉をひそめる。

さきほどの赤面といい、彼女としては表情を出してる方だ。

「にこにこペラペラと調子いいわね、ナナって。さっきまでそんなに悲壮な顔してたっていうのに。ほらまた笑った」

「そうやって詩紀ちゃんが感情的になってくれるのも嬉しいんだよね、僕としては」

今は美紀ちゃん優位フェイズかな。

「そんな感想を言ってるの今のうち。言っておくけれど醬油も自家製。はたして食後もその減らず口が続くものか見物だわ」

「そりゃごもつとも。まずはいただきます」

既に謙遜をはるかに通り越し、料理人が客に向ける言葉とはとも思えないが、少なくとも見た目は立派な活造り。ここは悪く

なるうちに食べるのが礼儀ってものだろう。
しかし。

「ナナ、怖じ気づいたの?」

「食べたいの山々なんだけどね」

箸が無いことを身振りで示す。

「なに、箸を忘れたの?」

普通箸だけ持ってきてる事はないと思うけど。

いささかわざとらしいため息をつくとき、詩紀ちゃんはより一層頬を紅潮させて、僕の向かいに正座した。

「緊急避難。仕方ないわ。いわばカルネアデスなサマリア人だから」

不相応に大袈裟な表現でもって自己正当化をはかっているところからすると、何か思い切ったことをやらかす気満々と見た。サマリア人がいささか気になるけど。

「それでは目をつむって、大きくお口を開けてください」

「はいはい。あーん」

歯医者さん? ちょっと似合うかもしれない。

「ほらそこ、あーんとか言わない!」

案の定テンパってるテンパってる。

とか想像してると、刺身が口の中に放り込まれた。

さすがに固いけど、咀嚼するうちに甘みが広がる。塩分が弱く味の強い醤油が良く合う。完璧な出来じゃないだろうか。

それにしても「あーん」とは。詩紀ちゃんにとっちゃ大譲歩だよ。どんな表情してるんだろう。

「はい、もう一度大きく口を開けて」

なんだか声が遠い。

Potato as material of miso soup なな

「ちいさいころさー、じゃがいもが嫌いだったの」

ヘッドライトの明かりがガードレールに引き寄せられるに近づく。私はブレーキを少し踏みシフトダウンしてコーナーを曲がった。コーナーに彼女の方に視線を動かすと、座席に背筋をピンとしてまっすぐに前を見つめていた。正面には夜景が広がってたが、彼女の目には映っていないようだった。

彼女の家では食卓にじゃがいもが上がる事が多かったらしい。彼女の父親は稼ぎは普通の工員だったが、家に金を入れるということせず、母親は体が弱く働けず母親の実家から送られてくるじゃがいもが少ない米の代わりだったのだ。

カレーやシチューはもちろんのこと様々な煮込み料理や蒸しただけ焼いただけのじゃがいもを食べることが彼女の毎日だった。

「特に味噌汁にじゃがいもが入ってるのは嫌だったな」

その頃の私は彼女をあこがれの生徒会長としか見てなかったように思う。いつも凛として生徒の見本となっていた、手入れの行き届いた黒髪が綺麗だった彼女に私は近づきたくて生徒会の書記になった。彼女の家庭の事情を知るとは当時はなかった。近づき難い憧れの存在、そんな雰囲気そうさせていたのだろうし彼女が暗にそれを望んでいたのかもしれない。

「生徒会長になったのも結局は内申が欲しかったから」

進学するだけの経済的余裕がないことは自明だった。奨学金を得ることは実家から逃れることの必要条件だったのだ。

「でも結局、逃れることがゴールだったのかもしれない」

薄目を開けてみると、刺身のおかわりをかかえて目前に迫ってくる尖端。

「うひゃ!」

反射的に上体を反らして回避。

もうちょっと気づくのか遅ければ、撫菜ちゃんとの二の舞になることだった。

「?」

詩紀ちゃんの手にあるのは、料理用の長い菜箸。

その端っこを長く持ってめいっばい手を伸ばした様子は、猛獣の餌付けか、さもなきや直訴といった風情で。

しかもこっちは見てないし!

続いての第二撃。回避成功。

第三撃。頬をかすったがかるうじて回避成功。

どうやら最初はまぐれのホールインワンだったとみえる。

「ナナ、私がここまでしてあげてるのにどうして逃げるの? ちゃんと食いつきなさいよ」

と、無茶を仰る詩紀様。

うーん、これって食べる方が調節するものなのだろうか?

「ね、ねがわくばもう少しゆっくり」

あの勢いじゃ「あーん」というより「ファントム」、というかむしろ三段突き。

「ん」

失敗。

「もうちょっと短く持って、手も伸ばしきらないようにして」

「んー」

失敗

推薦で大学に進学して、一年後に体が弱かった母親が他界し目的を見失った。無気力なままに卒業し、生活のために働き始めた。「男と付き合っても、自分の中の家庭像が見えなくて。何となくに年月を積み重ねて来たけど、原点に戻ってみようかなって」両親も実家もないこの町に降り立った彼女に声をかけられたのはあの頃を同じ雰囲気を持っていたからだろう。

街の光が駆けていくあの頃と変わらないような彼女の横顔。薄いベールのしたにはこの町を離れていた十二年という時間の積み重ねが積もっていることを私は知っている。それは私だって同じだ。高校生の頃のように無邪気に憧れることは出来ない。遠くで見つめるには存在がもう近すぎだった。

「よかつたらさ、一緒に暮らさない。この町でさ」

そんな提案がふと零れていた。急に気恥ずかしくなって、フロントウインドウを注視するとはほえんでうなずく彼女が写っていた。

車は目的地に着いていた。サービスイリアで買ったじゃがバターはすっかり冷めていたが、意外に甘かった。

「さあ、陽佑くん。この箱には何が入っているでしょう？」

「えっ？ 何が、って言われても……」

彼のみならず、周囲一同「何だろう？」とクエスチョンマークを浮かべている。

「何か思いつくでしょ？」

「んー、カステラ？」

形とサイズから言って、確かにカステラでも入ってそうな箱ではある。

「ぶー。あげるから、帰ってから開けてみて。帰ってからだよ？」

注意とともに時子から彼の手へ渡された箱は、カステラよりも少し軽いようだ。しかし「開けるのは帰ってから」と念押しされたので確認はできない。

今度はいったい何だろう。彼もクラスメイトもすっかり不思議と期待に囚われている。

時子は「ぶっかけ疑惑」が忘れられてしまった場で穏やかに笑うと、教室を出る直前、くると振り返り大声を投げた。

「少年よ、ジャガイモにはマヨネーズより塩だぞっ！」

再びウィंकを決めた彼女の視線は、呆れかえる少女のもとで一瞬停止した。

「恋と憧れは別物。安心して」

彼女が去った教室で、二つの視線が交錯している。

「もうちょっと近づいた方が」

「ほんとに注文の多い客ね」

「いや、客が注文するのが普通だから」

宮沢賢治じゃあるまいし。

万事がこんな具合。その後の交渉は困難を極め、極力距離を取ろうとする詩紀ちゃんをなだめすかしてまともな射程内に呼び込むのには、実に二十分を要した。

その箸貸してくればすむことなただけ。とはさすがに言えなかった。それこそ活造りにされそう。

結果。

減多にないごちそうにはありつけたものの、それ以上のエネルギーを消費した気がする。

詩紀ちゃんに至っては、僕に食べさせるだけで手一杯で一口も食べてない。

「心配には及ばないわ。燃費いいから」

確かに銀髪紫眼の日本人離れた容姿は、いかにも「ハイブリッド」って感じだし、彼女がものを食べてる姿は少年時代を含めてもほとんど見たことがない。

いくら彼女でも食べなくて大丈夫、ってわけではないだろう。実はあの髪で光合成してる、とかでなければ（完全に否定できないのがちょっと怖い）。

何か見つからないかとポケットをあさってみると、指に当たるものがある。

「お」

声嘎れ対策のために入れておいたやつだ。

「飴ならあるけど。ミントは大丈夫？」

「だめ」

一瞬で却下。もしやとは思ったが案の定。念のため聞いてみて良かった。

「あんなものの口にするなんて信じられない」

はあ。見た目はクールでミントなのにね。

「シナモンとかも？」

「ありえない」

「ってことはオールグレイ飲めない？」

ベルガモットのあれ、だめな人いるんだよね。うちの父親とか「別の惑星からきた茶葉じゃないの？」

それは別のグレイじゃないかな。

「うーん、せめて後で菓子パンでも買ったらいいよ。残ってるかわからないけど」

そうは言ったものの、彼女がメロンパンとかチョコクロネとかはむはむ食べてる様子は想像しがたいものがあるが。

「ん」

詩紀ちゃんは立ち上がってスカートの埃をはらうと、すっと手を差し出した。

「お手じゃない！」

さっきの続きかと思いました。

「ん」

また同じように右手を差し出す。やり直し、という意味らしい。ぎゅっ。

「何してるの？」

「手を繋ぎたいのかなって」

「繋ぎたいのはナナのほう」
「そりゃ申し訳ない」
「何で放すの？」
一端はなした右手をものすごい勢いでひつつかまれる。
「繋ぎたいなら繋いでおけばいいでしょうに」
要するに詩紀ちゃんも繋ぎたいんだな。
「そこ、にやにやしない！」
「してませんで」
「いいつつ、にやついてのは自覚してるわけだ。」
右手同士を繋いだまま、こんどは左手を差し出してくる。
「??」
「ナナって時々ものすごく鈍いわね。わざとやってる？」
「減相もごさいません」
「何回も言わないからちゃんと聞きなさい」
「了解」
「あ……」
「あ？」
察しが悪くて申し訳ない。
「飴、飴をよこしなさいって言ってるの」
「ミント食べられないんじゃない？」
「食べるものですか」
「わけわかりません。」
でも、食べもしないのど飴を奪い取っていった彼女の足取りが
ちょっとだけ弾んで見えたのはひいき目だろうか。

しばらくの間は意味もなく手を繋いでいたわけだが……後片付けをするという詩紀ちゃんに追い出されて置いて教室に戻ってみると、僕の席は占拠されていた。
「午後は自主休講だな」
机に腰掛けた篤史兄さんが、突っ込む前に言い訳する。という
か言い訳になってない。
「篤史ちゃんの付き添い」
僕の椅子の方には結香^{ゆか}さん。息が合ってるなあ。
もしかしてこのまま二年生に紛れ込むつもりなんだろうか。今
だって思いつきり教室中の視線を集めてるっていうのに。
自分たちがどれだけ目立つのか自覚無いとみえる。
「で、何かご用ですか？」
やな予感を押し隠しつつ聞いてみる。
「俺は許嫁同士の逢瀬を覗くような無粋な真似はしない。まあ、
詩紀の意向を無視して乱入できる人間なんぞほとんどいない筈だ
けどな」
「はあ」
「その代わりちゃんと顛末を報告してもらうぞ」
「……どうして篤史兄さんにそんなことまで言わなきゃならない
んですか」
「詩紀は俺の大切な妹だからな」
と、胸を張って言われてしまった。
そういえば、一応そういうことになってるのだった。落ち着き
ぶりって点ではあっちの方が姉に見えることも多いけど。
「かくかくしかじかです」
「ふうん」

ど。私、ファッションとか興味ないから」
「あのさ、その、まあ、服の話はその辺にしてさ。時子さんのこ
とも、もう気にしてないし」
「わかった。でも、あんな姉さんでいいの？ ううん、姉さん、
あんなだけと本当は優しいから……」
風子の瞳が揺らいだ。口をついて出た言葉は、出すつもりにな
かった言葉だ。とっさに言い繕ったが、陽佑は気付いてしまった
のだろうか。

しかし彼女の心配が的中することはなく、陽佑は答えた。
「ああ、時子さん、優しいそうだな……」
彼の言葉もまた、何かを心配するように歯切れが悪かった。

S

彼は昨晚、いったい何をしたのだろう。
果たしてジャガイモは本物なのか。
クラス中が固唾を呑んで見守る中、火蓋は切って落とされた。
「おはよ、陽佑くん。今日はずいぶんとスッキリした顔をしてる
のね？」
「おはようございます。特に変わったつもりはありませんけど」
今朝も現れた時子に、陽佑の物言いは半ば食ってかかるといっ
た様子だった。
観衆となったクラスメイトも彼の変わりようには少々驚いてい
る。
「何かあったのか？」
「さあ？」

しかし牙を剥かれた当人、時子は平然と始めた。
「あらあら、まだ元気なんて若いわあねえ。昨日あんなに、真っ
白なナニを私にぶっつけたのに。まだ残ってるのかしら」
「べ、別に、俺は」
想定外の攻めにうろたえると、周りはおつという間にどよめい
た。
「やるなあ。男はやっぱり思い切りが大切」
「俺も同じことしたと思うわ」
「本人に確実にバレるとなると、ちょっと迷うけどな……」
男子からは好意的な反応が相次ぐのに対し、女子からは厳しい
言葉が飛ぶのは、この世の常。
「信じられない、嫌らしい」
「そんなので女の子が喜ぶのなんて、妄想の中だけよ」
そして男女問わず、ジャガイモの存在に感嘆の声を上げるもの
も少なくなかった。
「本物だったのか……」
「どういう仕掛けになってるんだらう？」
「私も試してみたい」
想像以上の大きな反応に、陽佑は言い返し直す機会を失ってし
まう。
むろん時子は、楽しそうに反応を聞いていた。十数秒の後、そ
ろそろかと声を上げたのも彼女だった。
「はいはい、みんなそこまでね。今日の本題はこれからなんだ
から、ね？」
華麗にウイंकを決めた彼女は、手に持っていた紙袋から、お
もむろに箱を取り出した。

時子はこの状況に、にやにやと猫ボーズを決め直したりしている。程なくして投げられた、その一石を待っていたかのように。

「時子、やめなよ」

彼女の背後から、声が飛んできた。

「あら、一樹くん。おはようじゃん」

「にやん、じゃないよ。時子の用事は終わったんでしょ？ だったら早く戻りなよ」

強い口調とともにやってきたのは一樹であった。妹の風子ならまだしも、彼が止めに入ろうとは誰も思っていなかったのだろう。助けてもらった格好の陽佑でさえ、意外な出来事にぼかんとしていた。

「一樹くんってば口うるさいにや。せっかく大好きな猫さんになつてあげたのにい」

矛先となった時子は相変わらずのマイペースぶりだったが、意外にも弱ったかのように現場を離れようとしている。「バイバイ」と手を振り、なぜかウインクを飛ばすと、くるっと一回転して教室の出口へと歩んだ。

彼女が廊下へと出る瞬間、横に流した視線は風子とぶつかった。風子は今日も、出て行く姉を見つめていた。

普段はクラス的女子数名と昼食を取っている風子だが、今日は陽佑の前に現れた。

「姉さんが、ごめんね」

そして突然謝った後に、彼を無言で連れ出す。行き先は中庭だった。

「たまには外で食べるのも、気持ちいいね」

「いや、分かったような気にさせるだけで何も言ってないだろ。ゆっかも納得するなって」

ちっ。

最近の結構これで切り抜かれるんだが、篤史兄さんほどの精神力の持ち主には効かないか。

結香さんには効いてるのが不思議と言えば不思議。抵抗する気がないからかも。

仕方ないなあ。

昼休みの出来事をごく簡単に説明する。クラス中が聞き耳立てるような気がするので、ひそひそひそ。

「このバカップル」

篤史兄さんの感想は簡潔明瞭。

「このバカップル」

別の方向からも同じ台詞が投げかけられる。

「篤史と結香ちゃんだけでも腹立つってのに、また美男美女かよ！ きたねえよ！」

篤史兄さんの親友、という仁藤先輩がなぜかここに。

「篤史達呼びに来たんだよ文句あるかよ」

強気な台詞のわりに表情は泣いてるし。

「ごさいませんとも。ぜひとも連れて帰ってくださいと助かります、先輩」

「女の子みたいな顔してるくせに、そうやってソツのないところが腹立つんだよな」

顔をどーしろと？

「これで意外と油断ならんからな、こいつ」

「篤史、お前には発言権ねえ！」

「あ、ああ、そうだな」

陽佑のきこちなさに、風子は再び、謝ってしまう。

「本当に、ごめんね……」

「時子さんはいつもあんな感じだから、いいんだけどさ……」

彼女の言葉に陽佑はうつすらと笑みを返す。わざわざ昼食をともししてまで謝られては申し訳ないくらいだった。

彼の笑みに風子も多少は和らいだのか、「ごめんね」以外の言葉が発せられた。

「姉さん、どういふつもりでやってるんだろう。陽佑の気持ち知ってるのに」

「ま、まあ、仕方ないよ。ほら、時子さんにだっていろいろあるわけだし」

「いろいろ……？」

青空を仰ぐ陽佑を見て、風子は腑に落ちない感覚を拭えなかった。陽佑のしているものが、自分の見ているものと違うような気がする。けれども、どう違うのかはわからない。

「時子さんは家でもあんな感じなの？」

「うん。一昨日みたいに、たまに度が過ぎたいたずらもする」

「あれは何と言うか、その、サイズが同じなんだと……」

「ほとんど同じ。ホックの止める位置が違うくらい」

「いや、そこまで具体的に言われると……」

陽佑は自ら言ったことの意味を改めてかみしめると、少々居心地が悪そう。

だが、風子がそういった空気を読むことはない。平気で続けている。

「だから服は一緒に使ってるの。ほとんど私が着せ替え人形だけ

本当に、親友、なのかな？

篤史さんの背後に姿をあらわす鮮やかな銀髪。

「こちら大切な妹ですが私のプライベートに何か？」

どうもずいぶん前から来ていたようだ。こんな目立つ詩紀ちゃんがどうやって姿を隠してたのか不思議で仕方ない。

「いや、興味あるのはナナの方」

「……」

ものすごく不機嫌そうな表情に、篤史兄さんが即謝り。

「ごめんなさい詩紀さんもうしません許してください」

分かっているなら要らんこと言わなきゃいいのに。

「あのな、予鈴はどうに鳴ってるんだが……」

存在を完全に無視された教諭は怒るところか泣いていた。

「このバカップルども、さっさと自分の席に戻ってくれえ」

翌日。

なぜか初さんが弁当を渡してくれなかったと思ったなら……

なんと詩紀ちゃんに手料理を振る舞ってもらえた。

毎日食べている初さんの弁当もすばらしい出来なのだけど、これは嬉しいサプライズだ。

しかも超豪華なフランス料理のフルコースときた。

「凄い、詩紀ちゃん！ そんな技持ってるなんて思わなかった」

「べつに凄くなんてない。十年以上もこればかりやってれば身につかないことないわ」

謙遜してるが顔が赤い。まんざらじゃなさそう。

「十年!? シェフ志望なの？」

想像してみる。むしろ綺麗な服を着てテーブルで食事している方が似合うと思った。

「そうじゃなくて……大事な、幼なじみに、おかしなものを食べさせられないでしょう。やっと人前に出せる腕になったのよ」

始めたのは小学校入るか入らないかの頃からってことになるから気の長い話だ。しかも相手は素人なわけで、完璧主義にしてもいささか行き過ぎな感はあるけど。

「僕のためにそんなに？ 感激だなあ」

「ナナのためってわけではないから。あくまでも実験台。これで大丈夫なら兄さん達に食べてもらおうつもり」

「それでも光栄だよ。最初に食べさせる相手に選んでくれたんだから」

初めて？ うーん。前にもこんな事があったような、なかったような。

どうも最近デジャヴが多いよね。疲れてるのかな。

さらに翌日。

なぜか初さんが弁当を渡してくれなかったと思ったら……

なんと詩紀ちゃんに手料理を振る舞ってもらえた。

毎日食べている初さんの弁当もすばらしい出来なのだけど、これは嬉しいサブライズだ。

しかもメニューは手打ち蕎麦ときた。

「凄い、詩紀ちゃん！ そんな技持つってなんて思わなかった」

「べつに凄くなんてない。十年以上もこればかりやってれば身につかないことないわ」

どうも最近デジャヴが凄く多いよね。疲れてるのかな。
……

「ど、どうなってんだ？ まさか、寝ぼけてるとか？」

「さすが時子先輩、ひと味違うな……」

「校内広しと言えど、あれをやっちゃうのは先輩だけだろ」

今朝の彼女は、ひそひそ声の大歓迎を受けていた。それもそのはず。

「姉さん、頭」

「可愛いでしょ？ ネコミミカチューシャ」

風子の突っ込みに、時子自身があっさりと言ったのけた通り。

ネコミミが生えていた。黒髪の上に、よく馴染んでいるのはクロネコの耳だ。

「わざとしてるんだ」

「もちろん。気付いたらカチューシャ着けてました、なんてドジっ娘じゃないんだから」

「そうじゃなくて……」

風子は表情を変えぬものの、時子を非難しているようだった。

ネコミミで盛り上がる教室中に「にゃん」と猫っぽいポーズを決めている時子が、彼女の機微に気付かぬわけではない。

「ウサミミは風子が着けてあげたら？」

「……私が着けたってダメなの」

彼女の反応に時子は確信を持つと、気まぐれな猫の如くスキップを始めた。向かうは教室の奥、彼の席だ。

にゃんと再び腕を猫にしながら、朝の挨拶。

「おはようにゃん、陽佑くん」

「お、おはようございます」

慌てて視線を外す彼に、時子はしめしめとえくぼを彫った。「あれれ？ 私に言うことがあるんじゃないかしら？」

「い、いえ、特に……」

言葉ですら平静を装い切れていないのだから、身体を抑えることなどできようもない。のぼせた彼を、クラスメイトは羨ましくも微笑ましく見守っていた。

原因たる時子はもちろん、微笑ましく見守るなんてことはしない。

「私の大切なところを撫で回したり、キスしたりしたこと、謝らなくていいのかなー？」

「そ、そんなことっ」

「しかもあんなにたくさん。おかげでお姉さんは寝不足だぞ？」

「……ご、ごめんなさい」

撒き餌のあった昨日と違い、今朝は多くの注目を集めていた。故に二人のやりとりは波紋を広げている。

「おいおい、あれはマジだったのか？」

「いや、ねえだろ。魔法じゃあるまいに」

ジャガイモに起こったことが、時子の身にも起こる。
一昨日の出来事を見たものたちは、概ね、手品にも満たないジョークであろうと受け取っていた。しかし本当に「ジャガイモに起こったことが、時子の身にも起こっている」らしい会話を聞いて、彼らはざわめいた。

「でも、昨日も言い当てたよ？」

「そうなの？ 気付かなかった」

「いやしかし、そうなるという試してみたいよな」

「嫌らしいこと考えてるでしょ？」

中には昨日の二人を見ていたものがいたようで、火に油を注いでいる。まさに教室中持ちきり。

さらに唐突な質問に、一樹は不思議を深めていた。
しかし時子は大満足らしい。

「そっかー、猫かぁ、一樹くんは猫が好きかぁ。ありがとうねーっ」

お菓子を配るときと同様、教室の端まで通りそんな声で復唱している。その上、キリッと明朗な笑顔も添えてお礼を返した。

余計に解せないという彼の顔などお構いなしで、次の訪問先へと移動した。彼もまた、撒き餌に寄ってこないものの一人だ。

「冷たいなあ、陽佑くんは。私のお菓子、嫌い？」

「いえ、そんなことは……。でも俺は当たることないですし……」

「だからって拗ねないの」

時子はスッと陽佑の手を包み、引き上げる。

陽佑は反応し切れずぼかんとしていたが、彼女はやっぱりお構いなし。彼の掌に紙の小箱を載せた。

「ほら、たまにはこうしてあげるから、ね？」

「あ、ありがとうございますっ」

自分用のプレゼントに、陽佑は笑顔を通り越して赤みを差している。

思惑通りの急な変わりように彼女は笑みを深めて、調子をそのままあつげらかと問うた。

「ところで昨晚、ツンツンしたでしょ？　くすぐったかったんだからっ」

「……はい？」

「あらら、とぼけちゃって。私の身代わりジャガイモに、ツンツンしてたでしょう？」

Afterschool ceremony 川鶴鶏肋

パンこそくわえていないが、遅刻遅刻ー！ってなもんで。

入学一週間目で遅刻じゃいくらなんでも体面が悪い。

今こそ無駄に恵まれた体格と運動能力を発揮するとき。

それにしても、浅葱谷の修道服じみた裾の長い制服は全力疾走には向かないなあ。

と、前方から迫り来る土煙一つ。

校門前のＴ字路で直角に左折、合流並走する。

今まさに閉まり来る正門をすり抜け、昇降口に飛び込む。

下駄箱で靴を履き替える。お隣は同じ制服のデコメガネ。こいつ、同じクラスの、誰だっけか。見覚えはあるんだが。

視線がぶつかる。

同時に駆け出す二人。

そしてデコメガネと再び並走する形に。

階段にさしかかる右コーナーが迫る。

当然、すこしでもコンパクトに回れるインコース取り争いになる。

アウトコースから当たっていきプレッシャーをかけるあたし。させじと押し返すデコメガネ。

「あつ！　い、いや、そんなことっ」

「嘘ついてもダメ。見たでしょ？　ジャガイモに傷を付ければ、私に傷が付くんだから」

「……………」

問い詰める声はカラッと明るい。

清らかな笑顔の時子に、秘め事を言い当てられる。どうしようもなく後ろめたい状況に、陽佑は紅潮を高め押し黙ってしまう。

「可愛い顔しても、あんなところにツンツンするなんていけないんだからねっ！」

「そ、そんな……………」

彼女の口から「あんなところ」と言われて、彼はすっかり茹で上がった。そんな妄想も経験がなかったわけでもなかるうに、現実の威力とは恐ろしいものである。

時子の方は俄に清廉な様子を潜めて、小さく一步。彼との間合いを詰めると、眼前で囁いた。

「好きなこと、していいんだよ？　撫でたりキスしたり、もつと、ね？」

手拔かりない仕上げを決めた時子は、踵を返して教室を去ろうとした。しかしドアを抜ける直前、冷淡な声が耳に入る。

「姉さん、いじめ過ぎ」

彼女が声の主を一瞥すると、見込んだ通りの風子が立っていた。

時子はもちろん翌日も、風子の教室に現れた。

現れること自体は日常の光景であり、何でもない。しかし今朝はいつもと違う。

「おい、あれ……」

体格差をものともせず、ぐっと腰を落としてしのがれる。むしろ重心の高いあたしの方が揺らいでしまって不利なぐらいだ。

「くっ」

コンパスを生かして三段段とぼして階段を駆け上がり、コーナーごとに離された距離を詰めることに成功。

二階のストレートでまた並走。

このままテープを切るだけなら胸の差であたしの勝ちだが、残念ながらゴールラインは右側にある教室の扉。こちらがアウトコースになる。

このまま差をつけられなければ負け決定。

予鈴が鳴り響く中、廊下を駆ける、駆ける、駆ける！！

が、直線では差がつかない。あとほどこまで最高速を維持できるかのブレーキング勝負。

勝ったな！

なにせあつちは指定のローファーだがこちらはひそかに運動靴って、なんか黄色い物体が？！

気をつけよう。少女は急に止まらない。

スローモーションのようだった。

自分の踏み込んだ左足がバナナの皮に乗っかり、見事にスリップし。

本当に滑るんだ、と、体勢を崩しつつくだらないことに感心し。反射的にのびした手がデコメガネの肩をつかみ。

デコメガネもまた体勢を崩し。

二人一塊になって、あとご想像の通りごんごろごろどしやーん。

予鈴が鳴り終わってたっぷり二分。

担任の符谷教諭が通りかかって、

「ローラに、そっちは折部か？ 変なところで寝てないで教室に入れ。ホームルームやるぞ」

セーフ。結果オーライ。

ヒゲ兄が大ざっぱな男で助かった。

「いててて」

痛む身体を庇いつつ立ち上がり、デコメガネに手を貸す。

「すまん。悪かった」

「いえ、こちらも些かムキになりすぎたようね」

吹っ飛んだ鞆を拾い上げると、教科書がばらばらと落ちた。

ありゃ？

明らかに教科書でない薄っぺらい冊子が約一冊。

「くすっ」

あまりの場違いさと微笑ましさに、思わず笑いがこぼれてしまう。

地味めデコメガネには不似合いというか、びったりというか。

「……」

デコメガネの表情が目に見えて険悪になった。

先ほどまでのレース中が真剣なら、今は悪意で満ちあふれている。

見られてはならないものを見られた、って感じた。

消されるんかなー、あたし。

「いや、気にするな。たかがホモ漫画」

「たかが、ですって？」

やっぺー。空気がさらに険悪となり一触即発の様相を呈したところに。

「おう、お前ら、なにやってんだ」

救いの神、というには頼りないが、ナイスタイミングだヒゲジヤンボ！

「あれ、ヒゲ兄？」

見た目でかくてヒゲで偉そうなだけで、実際には新米もいいところなんだけど。

デコメガネはさすがに口をつぐんでいる。教師の前で喧嘩はできないいな。

「学校でその名で呼ぶなよ……なんだお前ら、怪我してるのか」と眉を寄せたヒゲ兄だったが、その直後、気味悪いほど晴れやかな表情に、

「おうお前ら、先生は負傷者を保健室に送ってくる。HRは中止各自自習してろ」

教室内に声をかけると、

「さあ、いくか」

ウキウキじゃん！

「うわ！ なにすんだ！」

「先生！ これセクハラですよ！」

「はっはっはっ、俺はお前らみたいな小娘になんぞ興味はない！」あたしとデコメガネは荷物のように両脇に抱え上げられ、保健室にまで運搬されたのであった。

「あら、大さん？」

保健室の主、似合いすぎるぐらい白衣の似合う、ふわんふわんのお姉さん。養護教諭の歓喜幸子先生。

あたしから見てもものすごく可愛らしいひと。

「おはよー」

時子は今朝も透き通った声を投げながら、教室に入ってきた。

「おはようございます」

「あ、髪型変えた？」

「はい、どうでしょうか……？」

「似合う似合う、可愛いよお」

みなも慣れたもので、当然に挨拶を交わしながら、彼女は風子の席へと辿り着いた。

「はい、お弁当」

「ありがとう。……これ、姉さんのじゃない？」

「あ、ごめんごめん。風子のはこっちだね」

風子の指摘を受けて、時子は紙袋から取り出した大きい方の包みと交換している。

時子のお弁当配達は今日も絶賛営業中。しかし教室中から絶賛されるわけは、お弁当配達以外にある。

「時子先輩、いつ見ても綺麗だなあ」

「癒やされる……。あの真っ白な肌がたまらん」

「妹の健康的な肌色もなかなか」

「美人姉妹の弟として生まれたかった」

「俺は真ん中に……」

まず彼女の存在自体が、男子生徒の称賛的。

加えて週に一回のお楽しみ。彼女が紙袋から何やら取り出して、絶賛の理由たる言葉を投げた。

「今日はお菓子の日です。夏らしくアイスクリーム！ と言いたいのだけど、溶けちゃうのでチーズケーキね」

「おー今週も火曜日が来たっ！」

「ありがとうっ！」

「時子先輩愛してますー」

歓声の中、風子に渡されたのは紙製の箱。ケーキなどが入っているあれだ。中にはだいたい、十数個の小さなお菓子が詰められている。そして箱の上には小さなメモ用紙。

「今日は十二人分、あとで風子にもらってねー」

それは宝くじの如く、十二の出席番号が書き連ねられたメモ用紙だ。

今日こそ我にと風子のもとに寄ってくる男子生徒たち。慌てなくたっていいのにねえと余裕で構えながらも楽しみに待つ女子生徒たち。

いつもの時子ならその光景を楽しそうに眺めているのだが、今日は輪から外れて教室の奥へと向かう。

餌を撒いても寄ってこないものはいて、今、彼女の目の前にいる一樹もその一人だった。

「おはよう」

「おはようございます。昨日は助かりました。バイト、代わってもらえて」

「どういたしまして。その代わり、ちょっと頼みたいことがあるの」

「え？ 何でしょうか？」

怪訝そうな彼の態度は二人の関係をよく示している。

仕事を別にすれば、時子が彼に頼み事するのは初めてのことだ。

「あとで、ね？ あ、そうそう、兎と猫はどっちが好き？」

「えっ？ そうですね……、猫、かなあ」

風子が彼の動揺に影響されていることも見逃すはずがない。だから少し、意地悪してみることにした。

「これをあげるから許して、ね？」

赤みの引かない彼に、時子はスッと手を伸ばした。

「ジャガイモ？」

「当たり前。でもね、これは私なの」

「……？」

時子の言葉に、陽佑は不思議を露わにした。彼だけではない。

風子も、下着を見せる珍事に集まったクラスメイトも「いったい何だ？」と不思議そう。

時子は集まった興味に満足すると、注目的、ジャガイモの載った掌を引き戻した。

「右の掌にはジャガイモ一つ。左の掌には、はい、ポケットから取り出したるシャーペンが一本」

彼女のよく通る声に気付くと、さらに幾人かのクラスメイトが寄ってきた。

「シャーペンのとがった先で、ザーツとジャガイモを傷つけます。そして私の腕を見ますと……、あら不思議、同じように擦り傷が！」

「……」

ブラウスが捲られると、真っ白な肌に赤い直線が描かれていた。観衆は半信半疑どころか、概ねわかっていよう。それでもお約束とばかりに盛り上がった。多くを占めた男子生徒が、曝された憧れの素肌に喜んだという見方もできる。

「ありがとー。みんなありがとー。ではこのジャガイモ、陽佑くんにあげちゃいまーす」

で、なぜかすっげー嬉しそうなんです。

「怪我した生徒を連れてきたよ」

「ええ。ありがと」

……見つめ合い、葉くさい部屋の空気をたちまちピンク色に変えてしまう二人。

「……」

「……なんてこと」

ええ、幸子さんて、幸子さんて、ヒゲ兄の彼女だったんか!?

……あたしや逢い引きのダシか。

「ちっ、ほんのかすり傷だったの」

「他に人が居ること忘れてませんか」

登校の連れと目が合う。

互いの代弁者の存在に気づいた途端、先ほどの雰囲気に戻ってきた。

まずった。こいつといっしょだった。

「何のつもりです？ 無礼な」

いちいち気に障る態度だな。恥ずかしいところを晒したのはそっちだったのに、逆ギレってやつか。

「無礼ねえ。ホモ好きの感性はちょっとわかんないなあ」

さしもの温厚なあたしも、ここまで言われて大人しくしてられるほど人間は出ていない。

タッパでは頭半分以上は差があるし、あたしは見た目いかにもガラ悪そうに見える（自分で言っていて悲しくなるけど）。

そんな容姿はこれまであたしを半ば孤立させ、半ば守ってくれていた。ちょっと機嫌悪そうにしてみれば皆一様に目をそらし、

何にせよくろみ通りの拍手喝采。時子は丁寧な何度か頭を下げると、腕を再び伸ばしてジャガイモを差し出す。

「えっと、あ、ありがと……」

「えーっ、もつと喜んでよお。だってさ——」

ジャガイモを受け取るも煮え切らない彼を見て、時子は用意したシナリオ通りに言葉を切る。

そしてトントンと間合いを詰めて、彼の耳元で囁いた。

「私に好きなことをできるんだよ？」

「……！」

小さな声に犯されたかのように、彼は再び耳朶を染める。

「変なことしちゃダメだぞっ、陽佑くん」

時子は彼とすれ違うように、振り向くことなく去っていく。見ずとも分かりきった結果に満足しながら、軽やかなステップで教室を出て行った。

その様を横で観察していた風子は、表情を変えぬまま一八〇度ターン。速やかに歩み出した。

「陽佑、先に行つて。私は着替えてから行くから」

「ああ、早く来いよ。って、俺も着替えるって」

慌てて背中を追おうとしたとき、彼の視界の端にちょこんと見えたのは、紙袋。

「おいおい、忘れものだぞー」

陽佑は時子が置いていった紙袋をひったくると、改めて風子を追いかけた。

§

口をつぐんだものだ。

が、そんなハッターはこの生意気なデコメガネには通じない。こうしているだけで心の底まで見透かされているかのようだ。

「腐女子を舐めないでくださいますか。デクノボーさん」

裸のココロを守るためには、素の自分でぶつかり合うしかない。「なら試してみるか」

「あら偶然ね。私も同じ事を言おうとしていたところよ」

口喧嘩では不利でも、体格的には明らかにこっちの勝ち。負け要素無し。

ならバックアップは万全ってやつだ。いける！

「大さんは、いつもいろいろ生徒のことを考えてるのね」

「ああ」

しかしヒゲ、目の前で進行中の喧嘩も止める気ないんかな。見た目だけでヘタレなのは遺伝なんだろうか。

「出るどころ出てもいいんだけどな」

「ええ、受けて立ちましょう」

こいつもつかかってくんあ。

「でも、理論だけでなく実践も考えた方がもったいいわ」

おお、さすが幸子さん。やんわりとヒゲ兄を注意してくれた。

「心配ない。こういう年頃は、こうしてぶつかり合うことで正しい距離の取り方を身につけるもんだ。見守るのもまた愛」

「さすが大さん！」

前言撤回。簡単に丸め込まれすぎ！

あたしらライオンの子供か。

「でも、OGとして少し助言させてもらうわね。女の子が顔に怪我とかしたらまずいし」

いや、ポケッとしててもやっぱり先生か。OGとはしらなかったけど、こう見えて意外と頼れるかも。
「符合さん達が保健室に来たのも何かの縁。遠澤学園に代々伝わる、採め事解決法を紹介してあげます」
それってえと、ここが共学になる前、お嬢様学校だった時分の話かな。

『「神判の儀」と『友援符の儀』というもののんだけど」
なんじゃその大仰な名前は。

「俺も初耳だな、それ」

「ええ、口伝でのみ伝わる秘中の秘だから、大さんが知らなくても当然ね」
う、うっさんくせー。

「神判の儀、聞いたことがあるわ」
「何、知ってんのあんた？」

「ええ」

デコメガネが重々しく頷く。

「かつてこの学校には、対立の深刻化を避け平和的に解決をはかるため、正義の在処を主に問う儀式があったという。噂にのみ残るその名、こんなところで聞くとほね」

おいおい、ナントカ書房かつての。

「もちろん、相応の覚悟は必要だけど、どうする？」

この人、物腰柔らかだけど有無を言わさないよな。

「いや、とりあえず詳しい内容を聞かせて欲しいんだけど」

と、当然のことを要求したところ、デコメガネがにやりと嘲笑を浮かべる。

「なに、逃げるの？」

「ブラ見たいんでしょう？ いいよ、見せてあげる」

教室で下着を曝している。

理由や過程がどうであろうと、異様な状況である。二人の微妙な雰囲気も手伝い、ぼちぼちクラスメイトも気付き出した。

それでも彼女は意に介していない。大きなサテンリボンが縫い付けられた半球を、トントんと叩きながら問うている。

「この上にTシャツ着て走る気にはならないよね？」

一方、陽佑の方は顔を赤らめ、汗すら浮かべている。見せられたこと、見せられているもの、そして新たに周りの視線。彼女に声を飛ばすに十分な条件が揃っていた。

「わかった、わかったら隠せよっ」

「別に大丈夫だよ？ 水着よりもしっかりできてるし、見せるためのものだから」

「大丈夫じゃねえよ、いいから隠せ」

たまらなくなった彼は彼女に詰め寄ると、ブラウスの前立てを無理矢理に合わせる。

教室中に落胆と安堵の息が満ちる。最中、予期せぬ客人が現れた。

「風子おー、って、ありゃ？ 陽佑くんってば手が早いなあ」

「と、時子さんっ。あ、えっと、これは違うんです。風子が脱ぐから……」

「うちの妹を大切にしていあげて、ね？」

「違いますって」

必死で弁解する陽佑。

涼しい顔の風子は、彼にブラウスを掴まれたまま。

「ふん、やらいでか！」

「では決まりね。準備は私と大さんに任せておいて」

あ、あー。

何をやるかもわからないまま、なし崩し的に妙なイベントに参加決定。

我ながら雰囲気流されやすい。

飛び交った差出人のないメールの内容は、

『放課後、旧体育館にて』

だった。

そして、

「何だよ、この人数」

全校生徒の半分ぐらい集まってるんじゃないか？

何をやるとも書いてないのに、物見高いな、おい。

ステージに上がった幸子さんは珍しく白衣じゃなかった。

修道女の格好が異様に似合うなあ。

さ・ち・こ！ さ・ち・こ！

自然と沸き上がるサチココール

「どーも、どーも」

何この謎のイベント。サチコ様ショー？ まさにオンステー

ジ？

彼女がさっと右手を挙げると、たちまち静まりかえる。

「よくぞ集まってくれました、子羊さん達。これより『神判の儀』を執り行います」

時子は飄々とそんな二人に歩み寄った。

「風子、可愛いでしょう？」

「ほうら、可愛ければこうなるんだから、少しはおしゃれしなくちゃ」
彼女は向かい合う二人にそれぞれ声をかけると、紙袋をトンと、

間にある机に置く。
「着替え。それじゃ走れないでしょ？」

改めてにこっと笑みを送る時子に、風子は多少の怒りを覚えることもない。結局は困らないように着替えを持ってきたる姉に感謝した。

「ありがとう」

時子は妹の言葉を受け取ると、くるっと身体を回して話題を変えた。

「あれー、一樹くんいないの？」

「一樹くん、って……？」

「立川一樹くん。このクラスでしょ？」

間違いだったかしらと振り向く彼女の前には、無表情と怪訝な顔が並んでいる。答えを返したのは無表情な風子だった。

「さっき帰ったよ」

「そっか。じゃ、あとで電話しようっと」

風子との会話に、怪訝な表情がわかりやすく変化している。

時子は感情表現が希薄な風子の姉である。顔に出やすい陽佑の心中を察するなどたやすいことだ。すかさず変化に反応する。

「陽佑くんってば膨れないのお。一樹くんとはバイトが一緒なんだよ」

「べ、別に……知ってますから……」

「って、お前がサボるわけないだろ」

彼女のもとを離れようとしていた身体を彼自身が引き戻して、再び屈み込む。じーっと彼女を凝視する。

「んー、嘘を言うわけないしなあ」

おかしい。絶対におかしい、風子が嘘をついてサボるなんてあり得ない。

ソフトに口にした陽佑であったが、心では強く信じていた。

彼女の顔色を見たところで嘘か本当かを見破ることはできないかも知れない。その実績がないのだから。しかし実績がないが故に、彼の確信は揺らがらない。

「陽佑は私を信用しすぎ」

「そうか？ 風子が嘘ついたことなんて、一度もないだろ」

やはり腑に落ちないと言わんばかりに、彼はゆっくりと上体を戻す。

しばらく退くつもりはなさそう。ならば仕方ないかと、風子はきつかけを発した。

「下着にちょっと問題があつて」

大きくも小さくもない彼女の声は、たくさんクラスのメイトがいる中で、少なくとも陽佑には届いた。

しかし彼は、うまく聞き取れなかった。聞き取れなかったと思った。

目の前の風子は声色も顔色も相変わらずの様子だ。聞こえたと思う言葉から想定される変化が見られない。

「……今、なんて言った？」

「下着に問題があつて」

やはり聞き間違いではないらしい。

おーっ！

何をやるのかも分かってないのに、なんでこんなに盛り上がるのかね。

他人事だからだろうなあ。

「これより起こる出来事はすべて神のご意志によるものなれば、立ち会いを望みし者は生涯口をつぐむべし。誓えぬ者は即座に立ち去るべし。決断はただ一人で行うべし」

一分の沈黙。

だれも帰らない。

こいつら、物好き過ぎ！

「よろしい」

幸子さんは満足げに頷いた。

「では、訴人・論人は前へ」

一同の視線があたしとデコメガネに集中。一斉に人垣が割れて道を作る。

原告と被告、ってことかな？

で、どっちがどっちなんかね、って、どうでもいいか。

しかしこれ、恥ずかしい。目立つの嫌いなんだよな。

「赤の側、一年B組所属一二五ポンド、狩谷楼蘭（がやろうらん）っ！」

なにこのBGM!?

つうか、なんで体重知ってる！ って、養護教諭か。

「青の側、一年A組所属一〇ポンド、折部織絵（おりべおり）っ！」

もしもし幸子さん。完全に違うノリになってきてるんですけど。

「ゲスト解説者、もとい立会人として狩谷さんの従兄である狩谷大先生をお呼びしています」

うわー、なんでヒゲ兄が。しかも修道士っぽい格好で。

高校二年生の、比較しなくてもおとなしめの、見るからに優等な女子生徒が、男子生徒に平然と言う科白とは思えなかった。それでも現実には現実、変わらない。

「もう一度言おうか？ 下着に問題があるから」

彼も年頃の男子である。もう少し熱く食いつくべき話題だろうが、熱くなりすぎたのか頭が焼き切れてしまったらしい。

三度突きつけられた予期せぬ言葉に、しどろもどろにようやくと反応する。

「あ、ああ、わかった。その、何だ、問題って……」

「姉さんの下着なのよ、今日」

「姉さんって、と、時子さん……?」

「そう。朝氣付いたらチェストの引き出しごと交換されて、って聞いてないか」

彼の反応は風子の予想通りだった。

それでも彼女は溜息を隠せず、溜息に気付いてくれぬ陽佑に言い直す。

「陽佑、聞いている？」

「あ、ああ。聞いている、聞いているよ」

彼はハッと視線を持ち上げ、彼女の瞳に合わせる。本人は無意識なのかも知れないが、露骨な反応だ。

私の胸でも見たいのだろうか。自問の答えを模索しながら、風子は理由の説明を再開した。

「姉さんの下着、派手だから。とても運動する気になれなくて」

「そ、そうなのか、そりゃまあ仕方ないよな、はは……」

心ここにあらずの反応が予想を裏切ることにはなかった。

彼女はもう諦めたかのように、次の科白を紡いだ。

「主の御心に従い、この名誉ある職務に全力を尽くすことを誓う。これでいいんだな？」

「ええ、オーケーです。かつこよかったですよ」

「そか？」

「たたく、そんなところでいちゃつくなんての、ご兩人。」

「では、審判の儀における規則を説明します。特に訴人論人の兩名には、これをよく心に留め置き遵守するよう期待します」

「はい」

「一対一、時間は無制限。決着は一方の気絶あるいは降参、立会人による制止によります。武器の使用は許可されません。なお、衣服に覆われていない部分への故意の打撃は反則と見なします。以上、よろしいですか？」

「……」

まんま決闘じゃん！

「なるほど、神明裁判か」

さすがのデコメガネも驚いていたようだが、すぐ彼女なりに納得したようだ。

「正しい方には主の御加勢があるから、当然勝つてことね」

ちょっと聞くと宗教的な意義がありそうに聞こえるが、野蠻きわまりない。

「逆だろむしろ」

お嬢学校時代の伝統じゃなかったんかよ！

そういえば、女子の冬服はワンピースの長袖ロングスカートで露出度がやたら低いんだが……なんてえげつないルールだ……

「……この学校って……」

「それでは、兩名は代理人を指名するように。もちろん、立候補

でも構わないけど」

「代理人？」

また幸子さんが妙なことを言い出した。

「ええ。それぞれの正義を信じてくれる、最も信頼できる人物を代理人とするの。文字通り交替して代理人が代わりに争うことも可能よ。敗訴となれば代理人は負債の半ばを負う事になるし、代理人がその座を放棄した場合には即座に敗訴が決定するわ」

「うえ」

それじゃ連帯保証人より重いぞ。

一年の五月にそこまでの相手を探し出すのは辛い。あたしや同出身者にはあまりいい印象を持たれてないからな。指名したところで即逃げられてジェンドだ。

あたしを見限ったぐらいじゃ悪い噂にもならんだろうし。

さて、どうしたものか。

「悪いことだけじゃないのよ。代理人には友援符が優先的に分配されるから、勝訴の暁には信頼に報いてあげることができるわ」

「友援って、まさか……」

「現状では三対一で符合有利だが、オッズは代理人次第で大きく動く事になる」

長身に眼鏡の二年男子がホワイトボードに予想を展開している。あれ、切れ者で有名な扇戸先輩じゃん。

次期生徒会長との噂も高い聖者様ともあろうお方が、なんで賭けの胴元やってんだ!?

「会計は扇戸君にお願いしたから、任せておけば安心よ。あ、もちろん二人には自動的にこれぐらいの債権が設定されているけど、今のうちなら増額も可能だから」

それは呪いのお人形？

Fukapon

「ブラ見たいんでしょ？ いいよ、見せてあげる」

彼女は笑みを浮かべるでもなく、紅潮を見せるでもなく。

「い、いや、別にそこまでは……」

「別にいいよ」

どこか遠慮したような口ぶりとは裏腹に、彼の身体は正直だった。ボタンを上から順に外す彼女を、食い入るように見つめている。

生徒が多数残る教室にもかかわらず、彼らは二人きりであるかのように続けた。

ブラウスのボタンを外すなど、毎日脱ぎ着している彼女にしてみれば造作もない。一つ、二つ、三つとあつという間に外し、スカートの直上まで降りた手は再び持ち上げられる。

同時に持ち上げられた視線が正面を捉えようと、彼の視線と交差しないことに満足して、あえて一呼吸。

「……」

彼女はついに、ギリギリと視線が突き立てられる胸をはだけた。

「ね？ 凄いでしょ？」

平然と曝された眩しい肌。なだらかな双丘を覆うローズレッドの下着。

鮮烈なコントラストが、彼の脳裏に焼き付いた。

と指を立ててみせる幸子さん。

「いや、そのままでいい」

その説明で安心できるかっての。うちらまで負けたら借金決定かよ。

「だから、早く代理人を決めちゃってね」

難しいことを簡単に言ってくれるなあ。

「それでは、わたしが」

進み出たのは、見覚えのあるカワイコちゃんなクラスメイト。ええと、三条樹菜だっけ。

華奢で小さいのに、可愛いというよりは大人っぽくて、清楚可憐って感じ。純和風の黒髪ストレートに真つ赤な蝶のパレッタが映える。

はつきり言って超絶美少女。正直、妬けるんだけど。

「ローラちゃん、よろしく」

いや、本能的な妬心は置いておくとしよう。

例え配当に目がくらんで体格で勝るあたしに賭けただけだったにしても。指名されたのならともかく、自分から申し出て旗色が悪くなったら逃げるような真似はそうそう出来ない。体面まで考慮に入れるなら、代理人のメリットなんてほとんど無いんだから大して親しいわけでもないのに、この状況で味方をしてくれるやつがいるなんて。ちょっと感動だしな。

「ありがと、ほんと恩に着るよ。あとローラ言うな」

「それじゃ、わたしのことは『じゅら』って呼んで」

聞いてねえ#

つか、じゅらって何だよ……

いやまて、がまんガマン。この状況で三条の機嫌損ねても何も

事の発端は数分前のこと。

「風子、部活行こうぜ」

ホームルームを終えた喧噪の中で、小金井陽佑はいつも通りに席を立った。彼は答えを聞くまでもなく、鞆を引っ提げて歩み出す。

ところが返ってきた中野風子^{なかのふうこ}の答えは、始めて聞くものだった。

「ごめん、今日は休む」

「あれ、風邪でも引いたのか？」

陽佑は踵を返すと、未だ座ったままの風子の顔を覗き込んだ。

……特にいつもと変わらない。尤も彼女の場合、顔色を変えることがほとんどないのだが、それでも異常があるようには思えなかった。

彼の見立ては半分当たっていた。

「ううん、元気。ただ、ちょっとね……」

しかし半分外れていた。言い淀む彼女は、いつも通りなんかではない。

「本当に大丈夫なのか？」

「うん。ありがとね」

改めて問うも返された答えは変わらず。

こうなれば不思議であろうと何も言うまい。彼はあえて軽く受け答えることにした。

「そっか。伝言あれば伝えておくぞ？」

「なら、サボりだって言っておいて」

彼の軽さに乗じて、彼女は事もなげに行った。

「おっけー」

引き続き彼も軽い勢いで……返せなかったらしい。

「本棚に並んでたんだもん。あたしだって棚開けたりしないよ」
向こうの方では帰ってくるなり大騒ぎだ。

「綾乃もあっちで少し待っててくれ。そんなに時間はかからないから」

「うん。あ、アルバム、止めた方がいい？」

「止めなくてもいいよ。私は見られても特に恥ずかしいから」

「ミキちゃんはどうかな」

「さて。実際に見てから決めてもいいかもしれないな」

綾乃は笑って、二人の方に歩いて行った。雅は部屋の前でどたばたしている美紀と佳奈を見てから、台所に並べられた食材と向かい合った。

いいことは無いんだから。この際細かいことにはこだわらない事にしよう。

「おい、ちょっと待て！」

人混みかき分けて出てきた人物が、慌てた声を張り上げた。

あれ？ 古生君？

「男が出てくるような俺が代わる。いいな？ 狩谷」

え、うそ!?

なんで、なんで古生こしょう燕雨えんうくんが？

ちょっと童顔のハンサムで、一見ぶっきらぼうで荒っぽい感じだけど意外にもフェミニストだったりする。

……………

ええ、タイプですよ。好きですよ。悪いかっての。

人気者の彼があたしなんか気にかけてくれてるなんて、感動を通り越して現実感ゼロなんだが。

それでもじわじわと頬がにやけてくるのを自覚する。嬉しいなあ。

が、

「いいえ。僭越ながら、ここは私に任せていただけませんか？」

じゅらはそう言うと、にっこり微笑みかけた。

同性でも虜にしそうな眩しい笑みに、古生君が引きつった愛想笑いを浮かべつつ後ずさる。

って、え!?

「申し訳ありません。今日のところはどうかお引き取りを」

深々と腰を折るが、これって「ぶぶづけでもいいかがどすか？」に近いものがあるぞ。

意識すると、「邪魔。出しゃばり。僭越。消えろ。以下略」っ

てとこか。

まさに笑顔でばっさり。

「……あ、悪かった。すまん」

顔面蒼白になって退散する古生君。

あたしもがっくり。

ええい、なんて事しやがる！ 差し出がましいのはあんただ！

……とは言えないんだよね。

幸子さんの指示で柔道部用の畳が敷き詰められていく一方で、デコメガネこと折部はどうしてるかというところ。

「林さん、お願いできる？」

「ん。オーケー」

目の前のいかにも文化系の女生徒に声をかけた。さすがに三条（じゅら、だっけ）の細っこさには及ばないとはいえ、いかにも運動してない風で、見るからに文芸部とかそんな感じ。

てっきり柔道部あたりを引っ張り込んで代理戦争させるかと思っただけ……

折部はべっこう縁の眼鏡を外し、折りたたんで林さんの胸ポケットに差し込んだ。

「おねがい」

ついで、靴と靴下を脱ぎ去り、コキコキと首を傾けながら畳に上る。

自分でやる気なのか？

これだけ体格差があるのに。それとも何か企みが？

大きな体に似合わぬ小心（自覚はある）が、これは畏だ、やめておくとブレーキをかける。

デコメガネ（眼鏡外したからデコか）が、人差し指でくいくい

と招いた。

「さっさとやりましょう。かかって来なさい」

実におもしろくない態度だった。

ヘタレなくせに結構カッとなりやすい。頭に血が上ると後先考えずに動く。これも自覚はある。

「はっ、いい度胸だ」

同じく靴と靴下を脱いで畳に上る。

「よし。では友援符の購入は以上で締め切らせてもらおう。以後は友の正義と勝訴を信じて待ちたまえ」

扇戸さん、生き生きしてるなあ。

「では兩名とも、主に恥じる事のないよう、先ほど説明した詳細に則り、肅々と儀式の遂行を心がけるように」

「はい」

「では、はじめ」

コールと同時に、デコの姿がぶれる。

速い、下だ！

低い姿勢からのタックル。

って、こいつ組み技系だったんか！

身長差を逆利用して、重心の高いあたしを引き倒す作戦だろうが……膝で迎撃、はできない。頭を押さえて潰すこともできない。自らの顔面を盾としての突っ込みとは、ルールの特性を上手く利用している。

「ちっ！」

あえて後ろに倒れ込んで胴を蹴り上げることで、折部の突進の勢いをそのままに逸らす。崩れた巴投げのような形で、不完全ながら攻撃を回避する事に成功。

それを間近で見えていたから、その笑顔が頼もしく、またまぶしかった。

しかし、何事もなく過ごせるといいな、と言ったからといって、そのとおりに過ごせるとは限らない。中学三年の時、初めてその言葉を口にした年は、その前の年と同じように嫌われ、恐れられ、暴れていたし、雅は何度も美紀を抑え、時にはその拳にこもった怒りを辛辣な言葉で相手にぶつけていた。美紀だけでなく雅にも、学校の中に味方はいなかったのだ。

高校に上がった年も、春から夏は中学三年目の焼き直しをしていたようなものだった。嫌がらせ、暴走、脅し、隔意。

それがただの繰り返しでなくなったのは、家で待っている二人のおかげだ。

「綾乃のこと、お前最初はスルーする気だっただろ」

「正直に言う、そのとおりだ。ああいう騒ぎになるのは目に見えてたから、これ以上お前が暴れて村八分にされるのを繰り返したくないかった。今から思えば、お前が反対してくれてよかったよ」

「オレもなんでかスルーする気にならなかったんだよな。佳奈だったらかんないな」

そう言って悪そうに笑う。悪気があるわけではないが、雅にか口にしない本音だ。美紀にとって、綾乃は特別だったのだ。「でも佳奈がいなかったら、結局二人が三人になったただけだっただろう」

「あー、それはそうかもな。あいつが当たり前みたいに話しかけてきたおかげで、普通にみんな話しかけてくるもんね」

きつと佳奈のタイミングがよかったんだ、と雅は言い、美紀は頷いた。雅はなんとなく美紀の次の言葉を待っていたが、なかなか

まかり間違えばそのままマウンとをとられるところだったが、賭けには勝った。

向こうにも大したダメージはないようだった。こちらも体勢が崩れていたとはいえ、大人の男を悶絶させるあたしの蹴りを食らって咳き込む程度とは、見た目より頑丈なやつめ。

「けほっ。馬鹿力の上になんて反射神経してんの。折るつもりだったのに」

しかも、しっかり土産を置いて行かれた。

蹴りを腕でガードしただけでなく、同時に蹴り脚の足首を捻られたのだ。

大丈夫、脚を戻すのが早かったのが幸いして、多少の痛みはあるものの動きへの影響はほとんど無い。

「……格闘技経験者か？」

「……格闘技経験者かよ」

ってことは、手加減できる相手じゃないが、少々怪我させたとしても一方的に責められる心配もないってわけだ。

何しろあたしは体格と腕力に恵まれすぎで、見た目も派手でけげばばしい。ついでに態度もぶっきらぼう。

思い返せば、小学生時代からいつも暴力ガキ大将扱いで、年上の男子と喧嘩しても弱い者いじめのように言われたもんだ。

それをあること無いこといちいち叱られていれば、萎縮して当然。

御陰様で今やいっぱしのヘタレ少女、もとい平和主義者なわけだ。

「生まれ持った性能だけで他人に言うことを聞かせられると思ったら大間違いよ、メスゴリラ。通信教育で身につけた護身術の恐

か耳に届いてこない。思わず美紀を振り返った。

「……どうかしたか？」

「ん？ あ、悪い。何だって？」

「いや、急にぼーっとしてたようだったから」

「ん、なんでもない」

何か、口にするかどうか迷っている風にも見えたが、雅は何も言わなかった。

「本当に、落ち着いたよな。学祭の準備も無難に進んでるし、平和でいいこったよ」

「ああ」

二人並んで、部屋のドアを開ける。中には明かりが灯っていて、鍵を開ける音に気付いた二人が玄関まで出迎えにきた。

「おかえりー」

「おかえり。早かったね」

「言っただろ、スーパード近いんだ」

はれ、と美紀が荷物を出すと、佳奈はニヤニヤしながら、袋に書いてあるスーパードの名前を読み上げた。美紀はわざとらしく溜息をついて、袋を持ったまま靴を脱いだ。

「ミキちゃん、何か手伝うことある？」

「手間はかからないものにしたから、大丈夫」

にっこり笑って見上げてくる綾乃に静かに答える。小柄な綾乃がそばに来ると、長身の雅にはまるで小さな子供に笑いかけられているような錯覚に陥る。美紀の目には、もっと魅力的に映っているもおかしくない。

「美紀ー。卒アル発掘したから見ようー」

「ちょ、お前何雅の部屋ん中漁ってんだよ！」

四人で騒いでいたらあつという間に時間が経ってしまう。窓から見える空の色が真っ赤になつてゐるのに気付いた雅は、綾乃と佳奈に留守番を頼んで、美紀だけを連れて買い物に來た。

「別に全員で来てもよかったんじゃないかね？」

「二人の方が早いし、ここはちょっと距離があるからな」

「オレは？」

「お前はいつも来てるじゃないか。今更氣にすることもないだろう」

美紀はなんとなく不満そうな口ぶりではあるが、顔はなんだか嬉しそうだ。雅も内心は似たようなものだ。わざわざ美紀だけ引っ張ってきたのも、買い物には二人で来たかったただけだ。

かごを片手に、売り場を並んで歩く。

「元々の材料じゃ足りないし、じっくり作るのものな。無難なところにするか」

「どこ？」

「カレー」

「なるほど無難だな」

「あとは……そうだな、じゃがいもが安いからポテトサラダでも付けるか」

どちらも作り慣れているだけに、買い物も確かに早く済む。売り場を一周する時間よりもレジに並ぶ時間の方が長かったくらいだ。

「あーやっぱいつもより確実に重いな」

「だろうな。倍近くあるし、今日は家に買い置き材料がほとんどなかったからな」

「今日作る予定だったのはどうするんだ？」

ろしき、思い知らせてあげるわ」

でも気が短いのは変わらなかったようだ。

「今の内にせいぜいついてる。そのテカテカはた迷惑なデコをサンドペーパーでマット仕上げしてや」

会話中にノーモーションの前蹴りで膝を狙う。

うちのスカートは長いから、一応フェア。

「っ！」

蹴りが延びきる前に踵を両手ですくい上げられた。自ら跳んでバック転で体勢を立て直す。

さすがに反応が間に合わなかったようで関節技を仕掛けてくる余裕はなかったようだが、なんで今のが止められるんだ？

「あ、あんた。もう少し女の子らしい喧嘩しなさい！ んなの当たったら膝壊れるでしょ！」

「いきなり折ろうとしたやつが言うな！ 今のだって、頭打ったら死ぬだろ！」

自分のことは棚に上げて、なんて勝手な。

やっぱこいつには教育が必要だ！

全力全開でボコる！

「おまえが！」「あんたが！」

「泣くまで！」

「殴るのを、やめなっ！」

何発入れても効いてる節がない。

蹴っても殴っても、掌で微妙に力を逸らされ、有効打にならない。しかも、わずかにでも触れたが最後、打ち込み、ひねり、投げを組み合わせて反撃してくる。

「明日に回す。お前が食べていけないなら月曜日の弁当にするかな」

美紀が袋を持って、二人でぶらぶらと帰り道を歩く。日が落ちると少し涼しく感じるくらいにはなつてきて、商店街の活気も手伝って、散歩していると気持ちがいい。

雅のマンションに近づく、途中で住宅街に入って急に喧噪が離れる。街灯が多めに設置されているから薄暗いと感じることはない。ちょうど日が沈んで夜に包まれた頃合いで、雅はなんだか二人で世界から切り取られたような心地がした。

「ようやく、落ち着いてきたな」

「ん？ 何が」

「いろいろと。学校にいる間ずっと気を張ってなきゃいけないこともなくなつたし、私たちも綾乃も、他に誰とも話をしないような状態じゃない」

「……ああ、そうだな」

半年前。まだ二人が高校に入ったばかりで、桜の花びらを踏んで学校に通っていた頃。雅は昼食を買ったファーストフード店でこう言った。

「今年は何事もなく過ごせるといいな」

雅がこの言葉を口にするのは二度目。それに美紀が頷くのも二度目だった

「ま、馬鹿がよっぽど手出してこなきゃ大丈夫だろ」

そう言って笑う美紀に、雅も微笑みを返した。雅は中学生の美紀を知っている。不安定でけんかっ早かったために周囲に恐れられていた。同時に、特に女子の一部からは云われもなく目の敵にされ、有形無形の嫌がらせを受けていた。

が、非力っ！

「ったく、なんて、頑丈なっ！」

呆れたように怒鳴る折部。

身体の丈夫さには自信がある。だてに不死身の巨大ロボット呼ばわりはされてないぜ orz

あ？

そうか！ その手があった！

何発からもうのを覚悟で、中心線を狙って一撃を繰り出す。

よっしや、もらった！ 肉を切らせて、ってやつ！

まともに鳩尾に蹴りを受けた折部が吹っ飛び、転がる。

「「おおっ！」」

いや、軽い。手応えが軽すぎる。

いくら何でも吹っ飛びすぎだ。

自ら後ろに跳んで衝撃を殺しやがった。見た目が派手なだけで、ダメージはわずかだろう。

「えっ、折部さんっ!？」

が、林とかいう文化系っぽい女の子にはそんな微妙なことはわからなかったようだ。

「……折部さん、ごめんね！ もう見てられない！ わたし降りる！」

……ええと？

うわ、ひでえ。

こんな簡単に逃げるぐらいなら安請け合するなよなあ。

すぐに起き上がりって反射的に構えをとる折部の表情も、啞然としている。

審判役のヒゲ兄が進み出て、動きを止めたあたしたちの間に入

った。

「兩名ともそこまで。折部サイド代理人のギブアップ宣言とみなすが、いいか？」

「林さん！」

じりじり後じさる林嬢を、でこ折部が呼び止めた。

「ごめんでもわたし自分が可愛いしお財布も薄いし借金なんて困るから」

「眼鏡置いてきなさい」

「はい」

押しつけるように眼鏡を渡すと、林嬢はこそそと逃げ去るように(逃げ去ってるのか)旧体育館から出て行った、

あたしと五分に戦ってたつてのに、デコのやつこれで負け決定か？

さすがに、敵ながら気の毒になってきた。

「神判は下ったことになるわけだが、両者、異存ないな」

「ええ」

不満げではあるが、折部はごねる様子はない。

意外に潔いやつだ。あたしだったら暴れてるぞ。

ふう。

「いよいよ折部、代わり呼べて」

「何？ 情けをかけるっての？」

胡散臭そうに眉を顰める折部。

まあ、あたしがあいつでも同じように思うわな。

「あたしらは神様の意思を尋ねるために闘ってるんだろ。林の意思じゃない。違うか？」

「……違わないけどね。そういうルールだし」

「そもそも親と三人で住んでた部屋だからな」

雅は美紀に自分が持っていた袋を渡して、三人を部屋に入れた。

美紀は勝手知ったる人の家、さっさと先にながってしまっただが、佳奈と綾乃は物珍しそうにきょろきょろしている。雅はその背中に「手を洗うなら洗面所はこっちだぞ」と声をかける。遠足に来た小学生のような返事が返ってきた。

二人を洗面所に案内する。さすがに並んで洗うスペースはないから、先に雅が使って、二人に譲った。遅れて美紀も入ってきた。

「大変じゃない？ こんなに広い部屋で。しかも超きれいだし」

「掃除は好きだからな。それに、いつもは自分の部屋とか普段使うところ以外は適当に済ませてる」

「今日は？」

「人が来るとわかってる時はちゃんとやるよ」

「おー、さっすが」

「ね。ミヤちゃんお料理もするんでしょ？ いつもお弁当だもんね」

「ああ。あれは前の日の残りや冷凍食品だから、そんなに手はかかってない」

「それでもすごいよ。あたし朝弱いから、いつもお母さんに怒られてるもん」

「雅ー、雅の部屋ってどれ？」

洗面所から一足早く出た佳奈が、早くも探索モードで雅を呼ぶ。

「……先に食事しないか？」

「あー賛成。オレ腹減った」

「あんたはいつも来てるから興味ないだけでしょ！」

「んーそれもある」

四角四面なやつだな。若禿になるぞ。

「こんなんじゃ終わりにするのも癪だからな。けちゃんけちゃんにノシてやりたいんだよ」

でこ女は薄く笑う。

「あんたはいいとして、そちらの綺麗な代理人さんの意見はどうなのかしら？」

「かまいません。少年漫画みたいな暑苦しいノリだけど、それでこそローラだわ」

満足げに微笑むじゅら。

これは、褒められてるのかなあ？

「その余裕を後で後悔しない事ね。でも劣勢な私に肩入れしてくれる代理人がいるかしら」

と、肩をすくめ自嘲気味に言うが。

「それなら」

捨てる神あれば拾う神あり、っていうのかね。

人垣から進み出たのは、さっぱりとした印象の清潔感を感じさせる男子生徒だった。

見た目は繊細そうで、言葉遣いにも控えめな印象がある。こういうタイプの男性アイドル、いるよなー。

「不肖、僕が立候補させていただきます」

「あんた……何者？」

「小暮潔です。一応クラスメイトの端くれなので、できればお見知りおいていただけると嬉しんですが」

小暮、つてえと、ああ、フェンシング部の噂の逸材か。

……またノリで動いたせいで面倒くさいことになったかも。

今でこそ消耗は五分と五分だが、小暮と交代されたら一気に勝

雅がリビングに戻ると、どうやら腹ごしらえから、ということに話が決まったらしい。佳奈が袋の中身を食卓に並べてくれた。いつもは自分で作るか食べてくるかなので、雅の目にはどこことなく違和感がある。

もちろん他の三人はそんなことは感じない。平然と食べ始めた。

「……相変わらずあんた、ポテトから食べるのね」

「いやだって、温かいうちに食べた方が美味しいじゃん」

「ハンバーガー冷めちゃうでしょ」

「こっちはまあ、冷めても食える」

そう言いながら、美紀はもともとポテトを食べる。雅は気にせずに月見バーガーの包みを開いた。

「そーいやさ、美紀がいつも来る時って夜でしょ？」

「そりゃまあ、放課後だからな」

「ご飯どしてんの？」

「ここで食ったり家で食ったり」

「いや、あんたじゃなくて……って、ここで？」

「買い物に付き合っって荷物持ちしたら作ってくれるから」

それを聞いて、佳奈は期待に満ちた目を雅に向けた。

「言っておくが、そんなにうまくないぞ。こいつは味覚鈍いから特に気にしないでいい」

「おい」

「でも食べたーいー」

佳奈の隣で、綾乃も控えめながら似たような視線を送っている。

「まあ、作るのは構わない」

若干不満げな視線を送る美紀をよそに、二人は歓声を上げた。

フライドポテトを食べながら 春屋アロツ

まだ夏の暑さが残る、ある土曜日。雅と美紀は友人二人を連れて駅近くのファーストフード店に入った。そろそろ昼時、店内は混み始めている。雅は三人を列から外れたところに待たせて、一人で並んだ。

「月見バーガーのセット二つ、えびフィレオのセット、それからフィレオフィッシュのセット」

「お飲み物は……」

「烏龍茶二つとコーラとオレンジジュース」

「コーラと、オレンジで。こちらでお召し上がりですかー？」

「持ち帰りで」

「かしこまりましたー」

ややあつてカウンターに袋が三つ並ぶ。タイミングを見計らって寄ってきた美紀がそのうち二つを持ち、雅は残った一つを手にとった。綾乃が持とうとするのを断って、店を出る。

「こっからどれくらい？」

「十分ってトコかな」

佳奈の質問に答えたのは家主の雅ではなく、隣を歩いている美紀だ。

「美紀は雅んち、よく行くの？」

「おう。中学の時も何回か行ったし、今年は週に一回は必ず行ってる。な？」

「ああ。時々泊まっていくし」

「マジで？ 綾乃は？」

「あたしは前に二、三回だけ。まだカナちゃんと仲良くなる前かな」

となると、佳奈だけがまだ雅の家にいったことがないということになる。不満げだった佳奈は、綾乃の最後の一言でふと真顔になった。

「それって、綾乃が大変だった頃？」

「そー」と答えたのは、前を歩いている美紀だった。

「収まってからは一度も来てなかったっけか」

「うん。だから久し振りだよ」

道とかもあんまり覚えてなくて、と言って照れ笑いをすると、振り返りながら歩いていた美紀が、たまらず綾乃を抱き寄せる。

「あーもうかわいいなあ綾乃は」

「わ、ちょ、わっ！」

「こらこらあんたら。つか美紀。外で歩いてる時にそれやんないの」

不意打ちに転びかかった綾乃に、すぐに手をさしのべる。その雅の手と佳奈に小突かれている美紀の肩に掴まって、綾乃はもう一つ照れ笑い。

「ありがと、ミヤちゃん」

「どういたしまして」

とろけそうな笑顔を浮かべていた美紀とは対照的に、雅は表情を変えることなく頷いた。綾乃は特に気にせず、美紀の助けを借りて身を起こした。

雅の家はマンションの一室だ。ファミリー向けの部屋を一人で使っているから、一人暮らしにしてはかなり空間がある。

「うわ、広っ！」

は暑苦しいイベントも必要だもの」

意味わかんねえ!？」

「なるほど、違いありません。時には運命の導きに従う事も大切ですな」

「そうそう」

何アイコンタクトだけで分かりあってるんだ、こいつらー！

余裕たつぶりの美男美女ムカック！

そしてこのデコもムカック!!

「えーいおまえも、小細工ばっかっ！ 真正面から来い！」

「ケダモノ相手に技術を使って何が悪いのかしらっ！」

少々のフェイントなんぞ、反射神経とパワーで押し切ってみせる！

体力バカなめんな！

「なら本気でオーケーだなっ？」

何のためにわざと何発も殴られてたとおもってる！

「！」

わずかな速度差でも、さっきまでのスピードに慣れた目にはどうかな？

逃がさない！

「もらった！」

「くうっ！」

タックルに成功。今度こそ完全につかまえた。

両腕ごと締め上げる。ヘアハッグが完全に決まった。

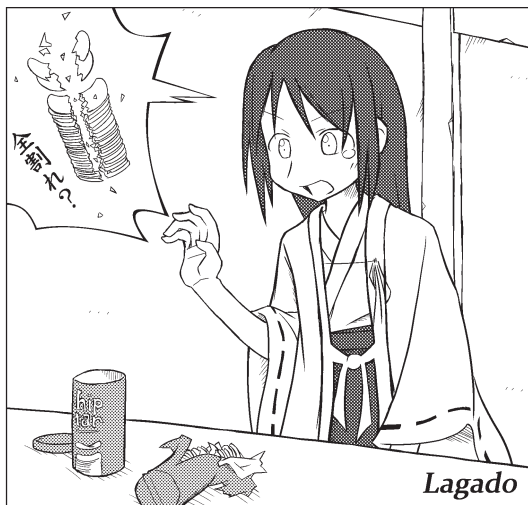
ルール上頭突きは不可能だし、密着からの膝蹴りは破壊力が出不い。男と違って股間に弱点無いしね（あら下品）。

「離しなさい！」

「や・だ・ね」
 まだ声出す余裕があるのか。さらに締め上げてやる。
 「ギブアップせい！」
 「……まだ、まだあ」
 「ふん、余裕がないな」
 勝ったな。
 そのとき、どこかで聞いたようなメロディーの電子音。
 「あら、兄さん？」
 「って、なんで兄貴の着信が恋風やねん！」
 あまりにもあまりなじゅらの発言に気が抜けた一瞬をつかれ、
 腕と身体の間隙に拳を差し込まれた。
 「しまっ……」
 ごこうん。
 「ぐえっ！」
 でこ女のやつ、密着状態からこんな重いパンチが打てるのか
 っ!!
 するり。
 衝撃で拘束が緩んだところをすかさず脱出される。
 しまったあああっ！
 「ナイスアシスト、三条さん！ げほげほ」
 いや、こりゃ自殺点ものだっ！
 「げほげほげほ、げっほ（だーっ、こういう時はマナーモードに
 しろっての！）」
 声出ねえ。
 「え、カリミさん？ ええ。少しでもお待ちくださいね」
 携帯のマイクをおさえて、じゅらが発言。

「狩谷先生、しばらく席を外したいのでタイムをいただけませんか」
 「……内容によるが。言ってみろ」
 とヒゲ兄が促す。
 「こちらに夢中になって定時連絡が遅れたせいで、大切な兄が発
 狂寸前だそうです。落着かせるのに三分必要なのですけど」
 「勝手にやってろよ。どうせあんたと交代するわけにはいけない
 んだからさ」
 そう言っていると、じゅらはにっこり微笑んでみせた。
 「……そんなに聞きたいですか？ 愛の囁き」
 「聞きたくねえ」
 そんな聞かされたら人として大切な何かをゴッソリ失いかね
 ない気がする。
 「んー、それは完全にお前らの都合だな。折部サイドの合意があ
 れば一時休憩を認めるが」
 ヒゲ兄の言い分は至極尤もだったりする。
 が、

ここまで戦いが長引くと、でこ女も結構消耗してるはずだ。少々
 休んだぐらいではたかがしれてるだろうし、今ならこっちにはま
 だ密着打撃のダメージが残ってる。でこ的には回復前にたたみか
 ける方が有利だろうな。
 うーむ、厳しいなこりゃ。
 下手に余裕見せて代理人交代をオーケーするんじゃないかった。
 とちよっと後悔していたのだが、
 デコ女は意外にもこう言い放ったのだった。
 「いいわよ。待たげる。思う存分歪んだ愛を語ってくるといい



なれば幸いだ。

「頼もしいな。こっちの世界でもこれまで通りよろしく頼む、フレア」

「こちらこそ」

大輔の差し出した右手を握り返す。

独特の高揚感。誰かに求められるというのは悪くない。例えば手が平凡な容姿の貧弱な坊やでも、妄想癖のファンタジーオタクでも。

一歩引いて見るならば、なんとも奇妙な組み合わせに見えるだろう。いかにもアンバランスで格差的。こちらは少なくとも外見上は相当の美少女に分類されるし、それなりの立場を築き上げてきている。人気者の優等生と引きこもりの中二病。傍目から二人の接点を想像することは難しいに違いない。

それでも当事者としては、きつとこいつとは長い付き合いになりそうだという、予感のようなものがあつた。

ううむ。

……良くない雰囲気だ。

実によくない。

いかにアホの大輔でも、睡蓮の演技に当てられて分不相応な思いがりを覚えたりするかもしれない。

おかしい感情が介在することは好ましくない。現在の良好な関係の維持に問題を生じる可能性がある。

今のうちに釘を刺しておく必要があるだろう。

「ごめん、念のため一つだけ言わせてもらえる？」

「……なんなりと」

「勘違いしないでね。私はあくまでも仲間として協力を申し出て

わ。たっぷり時間稼ぎをなさってちょうだい」

「うわ、余裕たっぷり、イヤミくせえ」

「ご配慮いたみます、折部さん。ではお言葉に甘えまして」

「え、ええ。どうぞ」

イヤミ全然通じないんだな。

じゅらは一礼して人混みを離れ、体育館の隅に向かった。見た目だけじゃなくて走り方までいかにも女の子っぽいのにちょっと感心、かなり嫉妬。

「流石です折部さん。感服しました」

大袈裟なヨイショも、小暮くんだとあんまり違和感ないな。

「これで貸し借り無しよ。次はないわ」

ほう。

潔いし義理堅いか。でこ女は随分と男前だ。性格はキツイが、意外と悪いやつじゃないのかもしれない。

「折角だからこっちも休ませてもらうよ。長丁場になりそうだからな」

「ご随意に」

なんとなく二人並んで座ってしまったな。

向こうの方ですっげーいい笑顔で電話してる美少女の声を努めて無視して耳に入れぬようにすべく、暇つぶしの会話を試みることにした。

「なあ、なんでこんなに突っかかってくるんだ？」

「何よ、藪から棒に」

何を企んでる、って疑念の視線が返ってきた。

「いや、不思議に思ったんだよな。あんた、分類するなら間違いなくカタブツだし。追いかけてこぐらいでムキになるようなタイ

るだけであつて、別にあんたに対して特別な感情を抱いているとかそういうのじゃないんだから」

「お、おう」

なぜか赤面する大輔に困惑した睡蓮は、自らが口走ったテンプレ的台詞の解釈について若干の考察を巡らした後、激しく後悔したのであつた。

プとは思えないんだけどな」

……ホモ漫画には言及しない方でおこう。その方がいい気がする。

「……見極めたかったから、かしらね」

意外にも、素直に返事が返ってきた。

「何を？」

「妹が絶賛する符合楼蘭。見た目はヤンキーそのものだけど、中身はどんなものかってね」

こいつの妹？ 知らないなー。

「で、可愛らしい乙女だつて納得してくれたか？」

でこ女め、鼻で笑いやがった……

この無礼者にはぜひとも一発くれてやって、あたしの乙女度を思い知らせてやらねばすむまいて。

「お待たせしました。兄さん成分、補給終了しました」

じゅらの奴、ツヤテカしてんなー。そんなにいいかね、兄弟なんて。

「では、儀式を再開する」

ヒゲ兄が重々しく宣言。見た目だけは立派だし、こういうの似合うな。

「兩名とも異存ないか？」

「ああ」

こちとら巨大ロボットと呼ばれた女だ（泣）。あたしの回復力を舐めるなよ。

「問題ないわ」

でこ女、折部織絵は言い放つ。もうボロボロだっていうのに、当初の挑戦的な態度とは打って変わって、らしからぬ爽快感のあ

る笑顔を浮かべてやがる。

「なんだよ、楽しそうだな」

「あなたもね。なにニヤケてるのよ」

言われて自分の顔に触れてみた。

あ、ほんとだ。笑ってるわ。

なんかエンドルフィンどばどば出てる気がするしな。疲れ果ててる筈なのに。いや疲れてるからかな。

「いいからさっさと始めろや」

「まだ決着つかねーのか。神聖な儀式なんだから真面目にやれよおめーら」

カノジョの膝枕で煎餅かじってる奴に言われたくないね。

とツツコミ入れる余裕もない。

「ぜえ、ぜえ」

「はあ、はあ」

ぼすっ。

窓から差し込む月光の中。

一人で立つこともままならず、お互いにもたれかかりながら、まるで腰の入らない超スローのボディーパーローを打ち合う。

今のあたしなら、きつとじゅらでも二人まとめて地に這わせられるだろう。

「ぜえ、ぜえ」

「はあ、はあ」

ぼすっ。

この女、結局あたしと五分か。信じられん。

場だと思ってるの？ これ以上突っ込まれる隙を与えるわけにはいかないんだから」

少女は相棒の手を振り払うと、仁王立ちして大輔の顔をずびっと指さして、宣言する。

「だからまずは生活改善。当分イモ禁止！」

「いや、それではピリドキシンが……」

「やかましい。あとちゃんと学校には出なさいよね。この時期から復帰してもタメは決定でしょうけど、このままじゃあんたが後輩になるのも時間の問題なんだから」

「……それは何か問題があるのか？」

「大ありよ！」

ふふん、と少女は挑発的に鼻で笑ってみせる。

「時空を超えた反抗の象徴になろうという男が、たかが学生の義務さえ完遂する器量が無いわけ？」

「むっ」

「精神的攻撃なんか怖がっちゃって、いつまで引きこもってるつもり？ そんなだから魔王の妃に学校を乗っ取られるのよ」

「……戦には時流というものがあるんだよ。これまでは雌伏すべき時だった。だからこそ俺はこうして身を潜め、連絡を取り合いながら反抗の機会を待っていた」

「で、それはいつまで続くのよ。来年、再来年？ まさか一生とか言わないでしょね」

「いいや、今日で終わりだ」

大輔は力強く宣言した。

ハンガーに手を伸ばし、長らく袖を通すことの無かった制服を寝間着の上に羽織る。

ここまであたしと殴り合ってまだ倒れないとは呆れるほか無い。体格で勝るあたしと同じぐらいの人数を食らわせてるはずなのに、攻撃を受け流す技で五分五分にまで持ち込んだのだから恐れ入る。なんで通信教育の護身術で素人がここまでになるんだ。

胴元やっていた扇戸先輩は時間切れ無効試合ルールを適用してさっさと払い戻しを決め(まったくソツのないお人だ)、これで興味の薄れた観客どもは一気に数を減らした。

「ぜえ、ぜえ」

「はあ、はあ」

ぼすっ。

そして残ったギャラリーは、今や互いの代理人だけ。

無理もない。もう八時を回る。三時間以上どつき合ってる計算だ。

「頑張って、セーラー！」

「折部さん、僕がついていきます」

頼りない声援だけど、じゅらの声は不思議なぐらいあたしの心に響き、尽き果てたと思っていた体力をさらに絞り出してくれる。

まだだ、まだ動ける！

「ぜえ、ぜえ」

「はあ、はあ」

ぼすっ。

それは折部も同じなんだろう。相手にしているとまるで底なしのようだ。どれだけ殴れば倒れてくれる？

いや、あたしは本当にコイツを倒したいのか？

倒れたくない、でも倒したくも無い気がする。

争っているというより二人でダンスを踊り続けているような妙

どこから見ても一分の隙もない普通の高一ボウズだ。口さえ開かねば自称勇者には見えない。

「フレアが合流し、往年の取り戻した時点で準備は整った。今こそ反抗の時だ。まずは学校を取り戻す」

「ふふーん、お手並み拝見といこうかしら。で、あの悪魔のような生徒会長にどう対抗するつもり？」

悪いけどダシにさせてもらうわ。と、心の中で南山晴蘭に手を合わせつつ、引きこもりの自称勇者様をさらに焚きつける。

「学生には学生の戦い方があるからな。正攻法でリコールに追い込んでやるさ」

まあこんなところだろう。とりあえず引っ張り出せただけで十分だ。欲張って中二病を治そうとする必要はない。

睡蓮がこれ以上玲韻から逃げ続けるのは難しいが、復帰するにしても世間体上の障害がある。生徒会長ではないが、家出だの出走だの蓄電だの邪推をうけるようでは、ガラスのハートが危機的に傷つきかねないピンチとなるだろう。

そう言う意味で、妄想少年の支援というのは、体裁を守るための隠れ蓑には好都合だ。

アレな妄想少年を社会復帰させるべく学校を休んでまで献身的に説得に励んでいた、人類愛にあふれた優しく健気な睡蓮ちゃん、というイメージで行く事にする。

「……分かった。ダイナスがやる気なら私も応援する」

それにまあ、彼女と個人的に懇意にしているとすれば、斗流十家の一つである四三家とのパイプの増強に繋がるわけであるから、竜胆家としても大輔を邪険に扱いつつけるわけには行かなくなる。一宿一飯の恩義と言っては何だが、ちょっとした援護射撃にでも

『もしもし?』

「だいすけーっ! ごめんね! たすけてえー!」

『~~~~~!!!』

言うだけ言って即座に回線切断。

「よし」

「あははははははははは!」

会頭様は下品に大口開けて爆笑している。

「やるわね、そういうの大好き」

秘書様は普段は決して見せることのない悪戯っぽい笑顔を浮かべ、胸を張って宣言した。

「もう安全に配慮する必要はありませんし、お志摩さんへの義理は果たしたので、お母さんは廃業です。今日から積極的にかたみちゃんにちよっかいかけていこうかと」

「まったく、子供かあんたは。あっぱはっは」

真面目人間が露わにした予想外の幼児性に、膝を打って大受けの揺子。

「まあそんなところです。疲れるんですよ、常識的な大人の態度って。あの娘には仕事上のストレス解消に役だってもらいます」

「暗にあたしがストレス源とか言ってる?」

「代行って、四三揺子やってる時にはいつもに輪をかけて酷いんですから。私まで一緒に遊んだら一体誰がブレーキかけるんですか」

「それこそ睡蓮ちゃんに期待したら? あの子にはツッコミの才能を感じるわ」

な連帯感。

「ぜえ、ぜえ」

「はあ、はあ」

ぼすっ。

奇跡のようなバランスで成り立つ、不思議な状態。

いつまでもコイツとどつきあい続けたい。そう望んでいるような錯覚? も覚える。

これってアレかな、ストックホルム症候群とかいうのの一種かも。

でも理屈は関係ない。

とにかく、楽しくなってきた。なぜか楽しくて仕方ない。

「ぜえ、ぜえ」

「はあ、はあ」

ぼすっ。

「折部さん、一度退くんだ!」

「追わないで、ローラ!」

膝が笑う。力の入らぬ脚を踏ん張り、なんとか身体を支える。

折部もどうにか倒れずに持ちこたえている。

お互い、あと一撃が限度だろうか。

「ぜえ、ぜえ、残念だよ」

本当に残念だ。

「そう、ね。はあ、はあ」

あたしと折部、二人の視線が交錯した。

思いは、同じか。

「この最高に充実した時間を!」

あたかも示し合わせたかのように、あたしと折部は倒れ込むよ

「……聞かれてた……」

最悪だ。

いっそ怒られた方がよっぽどマシである。

最近はずっかり影を潜めていたが、少女時代の玲韻は今とはだいぶ雰囲気違ったのを思い出す。

いたずらっ子玲韻、どうやら健在だった模様。

となれば、当分のネタでからかわれるのは間違いない。

「ほら見なさい、大人子供に目えつけられたわ。それもこれも大輔がさっさと助けに来なかったのが悪い!」

睡蓮は真っ赤な半泣き顔のままで、大輔をキッと睨み付けた。

「そんな理不尽……」

「理不尽じゃない! ヒロインのピンチに手をこまねいてるなんてヒーロー失格。颯爽と現れて事件を解決するのがお約束でしょに」

「そういう事なら勿論強力は惜しまない。次は早めに声をかけてくれ」

重々しく頷いて十分な器量を示したと言える大輔に、ガーンとかみつく。

「呼んでから来てどうすんの! ヒーローなら流れで察しなさい、流れで」

「分かった分かった。努力する」

一晚にしてすっかり回復した大輔は、睡蓮の豹変っぷりと剣幕に辟易した様子ながらも、その表情は心なしに楽しげだ。

「……一見お嬢っぽいのにそういう無茶苦茶なところ、だんだん昔のフレアらしくなってきたな。よしよし」

「ななな馴れ馴れしく撫でるな妄想ヲタ! 偉そうな事言える立

うに踏む込み、

「この手で終わらせなきゃならないなんて!」

繰り出した拳は互いの右頬をまともにとらえ、二人の身体はぶつかり合った独楽のように回りながらはじけ飛んだ。

飛ばされた距離が随分違うのが腹立たしいが、もう立てない。これ以上一步も動けん。予備電源まで使い切った感じ。

「両者反則、だな」

ヒゲ兄が呆れ顔で宣言。

ああ、あたしだって呆れてる。

でも、残された体力で折部を倒せる可能性があったのは、顔面攻撃だけだったんだよ。

そっちでぶっ倒れてる折部なら分かってくれるはず。

って、なんで分かり合ってるんだあたしら。

「夕日の中ダブルノックアウトで芽生える友情。これこそ青春ね」
我が意を得たりとばかりに満面の笑みで何度も深々と頷いてるが、サチコ様の青春観は歪みすぎだと思います。

それにもう完全に夜です。

「なあ幸子よ。こういう場合はどうなるんだ?」

「そうねえ。よっと」

無造作に腕をつかまれた。そのまま無造作にずりずり引きずられる。

おーい、幸子さん?

「主預かりでしょうね。そういうわけだから、二人とも行きかかりはお忘れなさいな」

動けないのを良いことに無理矢理折部と握手させられてしまったが、お互い横たわったまままだから違和感バリバリ。

さらにご丁寧にぶんぶんと何度もシェイクされるが、織絵嬢は無抵抗。憧れと尊敬を集めるサチコ様の、意外とエキセントリックなところを見せつけられて困惑してるご様子ですなー。

「はいこれで仲直り完了」

あたしらそんなにお手軽じゃねえ！

と言いたいところだが、闘志なんて最後まで燃やし尽くしてしまっただけだなあ。

むなしい、というかアホくさくなってきた。

さっさと見切りつけて帰っちまった連中の方が物が見えてたって事かも。

身体動かすまでわからんの、反省すべきだなー。

「……おー、おもつきし殴って悪かったな、折部」

「……意外に殊勝ね」

疲れ切った顔に、折部はにやっと笑いをうかべてみせる。

「私なんかと引き分けた事を認めたくなくて言い訳でも連発するかと思ってたけど」

「いや、マジ強かったから。絶対その辺の男に負けないだろ」

「ま、負けるようじゃ護身術の意味無いしね」

そうかあ？

「いやあ、無事逃げられればぶっ倒す必要はない気がするけどな」

「後顧の憂いは断っておいたほうがいいでしょ」

その発想は護身術の域を超えてるんだがなあ。

「そんで手加減無しかよ……お互いこんなバカな喧嘩で大怪我なくてよかったな」

「同感。ま、少なくとも悪い奴じゃないよね。身体張った甲斐があったかしらね」

痛恨の失敗である。

それでも、ともに暮らしていた間は力の発動が抑えられていたという事実は、玲韻にとってはわずかな慰めにはなった。むしろそれは同時に、睡蓮の出奔に伴って被害が発生した事をも意味するのだが。

一時は自らの手で親友の忘れ形見を処分する事すら覚悟した。一対一で彼女を倒せるかはわからず、彼女の父親の助力を得ることの是非についても考えた。

だが偶然というのは面白いものだ。睡蓮は確たる目的意識もない逃亡の過程にて、不安を振り払う事に成功したばかりか、能力を真の意味で制御するために必須となる相棒さえ得たのだ。

いや、不思議はないか。玲韻が相棒である黒男、すなわち志摩の夫にして玲韻の父親と出会ったのもまた、偶然のなせる技であつたのだから。

遺言まで使って余計な世話を焼いていたところをみると、志摩も何か勘違いしていたとみえるが、相棒としての適性と恋愛感情とは全く別の問題なのだ。まあ、夫婦というのは常に近くにいても不自然でない便利な立場であるから、やはり志摩には感謝せねばならないが。

制御される偶然は運命と同じであり、睡蓮の犠牲となった者達は時を遡ってここで偶然死ぬ運命を得たという事になる。

ならば、ここに玲韻や睡蓮が存在している事自体が何らかの干渉の結果でないと、一体誰が言えるだろうか。

世界がここまでたどり着くそうした過程で、世界はどのように書き換えられてきたのか。

存在さえ疑問視されている『尚書』なる星鬼は、アカシックレ

すっかり忘れてたけど、妹が云々と言ってたやつのことか。「つまり合格ね」

いつの間にか背後に忍び寄っていたじゅらが、あたしのほつぺたをつつき始めた。

「いてっ！」

「『氣に入った。私の家に来て妹を四文字単語していい!!』、とか言わないのかしら？」

清楚可憐な見た目に似合わぬ下品なジョークに、見かねたか小暮くんが止めに入る。

「お願いしますから、もっとお上品に」

……いや、ちょい待て。

「じゅら、あんたさっきの会話聞いてなかっただろう!？」

妹がうんぬんとか知らない筈だが。

「わたしの情報網を甘く見ていただいては困るわ」

と、鼻高々のどや顔。

わけがわからんが、なんにせよ油断ならん奴だって事は理解した。こいつの動向には今後気をつけよう。

「こらヒゲ兄！荷物みたいに運ぶなー」

またも両脇に抱えられて保健室まで輸送されたあたしと折部。

最初は意外に感じたが、幸子さんと凄くお似合いな気がしてきたよ……

あたしら二人は幸子さんにより怪我の治療を受け、

「さすがに丈夫ね。あれだけの打撃で内臓にダメージがないんだから。常人なら三回ぐらいいは死んでるわ」

コードを元に現在の世界を観測・検閲する力を備えるという。そんな得体の知れないものに憑かれるという類い希なる運命の持ち主になら（ほらまたここでも「運命」だ）、すべての経過が見えるのだろうか。

書き換えられる前の世界を知る、最も希少で最も意味のない能力。妄想との異同を証明しようのない能力。

真実に存在するのかが証明できない。睡蓮の力ともまた同じだ。ならばある意味、睡蓮の相棒としてこれほど相応しい人物はいないわけだ。

そしてそれもまた「運命」と。

……これでは堂々巡りだ。いい加減馬鹿馬鹿しくなってくる。

書き換えられる世界の中で生きる者達がいかに説を巡らせても、証明が出来ないのであるから単なる思考実験にすぎないのだから。無駄なことに頭を使うのは止し、ここは定説に従って解釈する事にするのが正しい。

ともあれ、睡蓮は相棒を見つげ出し、不安を振り切った。

家出直後より睡蓮がまき散らしていた偶然の死は、彼女の不安の増大とともに、鬼すら殺すレベルにまで上昇していたのだろう。事実、昨日の時点で不可解な急病・急死者の発生は突然減少し、偶然として納得できるレベルに戻っている。

お志摩さん。あなたのカタミちゃんは今もう一人前です。

心中で天国の親友にそう呼びかけると、玲韻は再び携帯電話を手を取った。

「そうそう……これ伝えるのを忘れていました」

着信履歴からコール。無論相手は睡蓮。

ばれなきゃいいなと思ってやがる……さすがヒゲ兄の彼女だ。

「今日のところは引き分けてことにしといてやる」

「決着はまたいづれ」

そうは言ったものの……

実力伯仲のこいつと決着をつけられる時は、本当に来るのだろうか？

腐れ縁になりそうな、そんな気がした。

でなくては。

「分かった。何とかするから待ってなさいよ。絶対あんたを死なせはしないからね」

とにかく、この少年を呪いから解き放たねばならない。

自己満足の代償行為？　それがどうした。大輔を救う事で睡蓮もまた救われるのだ。

大きな傷を避けるためには多少の痛みは覚悟せねばならない。

少女は決断を下し、携帯電話を手を取った。

「もしもし、玲韻さん？　睡蓮です」

自分で及ばないなら、それが可能な人物に下駄を預けるほかない。

「珠坂大附属病院のベッドが一つ必要なの。何も聞かないで手を貸してもらえませんか？」

家出娘が連絡してきたと思ったらいきなり好き勝手な要求。さすがの玲韻でも気分を害するだろう。

だから、こじれる前に用件だけは伝えてしまう。

ここまでさんさん迷惑をかけた挙げ句だし、玲韻であれば少女の考えも行動もお見通しだろう。今さら守るほどのプライドは残っていない。あとは土下座でもなんでもしてやる。髪の毛燃やされて坊主頭ぐらいいは覚悟の上だ。

とにかく、大輔をベッドに縛り付けてでも身体を治療せねばならない。

築きあげてきた信頼関係もこれでお終いだ。フレアとしての彼女は完全に否定されるだろう。だが大輔が睡蓮の被害者に名を連

ねる事だけは阻止出来る。

竜胆家の顔にも泥を塗ることになるが、斗流の第四位たる四三家の出身たる玲韻ならば抑えることも可能だろう。

『おめでとう、カタミちゃん。そしてお幸せに』

玲韻の第一声は、怒気を孕むどころか、実に楽しげなものだった。

「……え？」

『私を頼ってくれたのは光栄だけど、ベッドはもう不要でしょうね。黒男さんとも竜胆家とも既に話がついているから、ずっとそっちに住んでも大丈夫。それでは相棒さんによろしくね』

玲韻は早口でそれだけ言って電話を切った。

「……はあ？」

さっぱり要領を得ない。こんな謎かけのような言動をする人物ではなかったと思ったが。

それでも、玲韻が自信満々にベッド不要というからには、きっと何らかの根拠があるのだろう。専門家を住診に送ってくれるのかもしれない。

最も信頼できる人物を頼ったのであるから、後は信じて待つことにした。

「いやあ、青春よねえ。でもちょっと不親切に過ぎるんじゃないの？　娘ちゃん、絶対混乱してるわよ」

会長椅子にふんぞり返るボブカットにファッショングラスにパシッルックの女性が、本来のこの部屋の主である四三揺子。

「……揺子さんのやり方を真似てみただけです」

が態度を取り繕わなくても同じように接してくれているのは、彼自身の懐の深さなのかもしれない。

自分の短所を突きつけられるのを恐れるあまり、自分を偽り他人の長所に目をつぶる。だが付き合いが深くなれば欺瞞は通用しなくなる。

今や彼もまた、玲韻と同じように、睡蓮の精神の安寧に対する脅威となっていた。

それだけではない。

ここにいないべきではない理由は、もう一つ別にある。

これまで努めて考えないようにしてきた不快な仮説が、少女の心中で膨れあがっていく。

睡蓮の考え無しで不用意な行動は、しばしば裏目に出てトラブルを呼びこむ。

少女の並外れた強運は常に彼女自身の被害を回避するように働く一方、彼女を含めた誰も幸せにはしない。

ああそうだ。睡蓮の負うべき不幸はいつも誰かが肩代わりする。それは時に、鬼を宿したオタク少年であったり。

生みの母であったり。

それがたまたま今回は妄想癖の少年であった。ただそれだけ。

手遅れになる前に気づくことが出来たのは、望外の幸運だったのだろう。きっと。

「イモばかり食べてるのに、全然効かないじゃない」

自己嫌悪は容易に攻撃性に転換される。

結果、言わなくても良い事を口走ってしまった。

Must be Happy 川鶴鶏肋

珠坂商工会議所ビル、最上階の一室にて。

「もしもし、会頭秘書の芳村です。ただいま会頭は御不在ですが」

……まあ、いることの方が珍しいのだけれど。

電話をとった若い女性は、流麗な眉を軽くつり上げた。

まとった漆黒のスーツのデザイン自体はありふれたものだが、要所要所にぶら下がった金鎖と錠前がいかにミスマッチだ。あたかも燃え上がる炎のように波打つ豊かな黒髪とあいまって、一種異様な迫力を振りまいている。

「私ですか？ ……はい、個人的事情でご迷惑をかけて申し訳ありませんでした。あとはこちらで処理します。ではよしなに」

珠坂財界において蛇蝎のように畏怖される彼女、芳村玲韻よしづねから謝罪されるという得難い経験に電話相手は恐縮しまくっているが、そのような事情は彼女には関係ない。

玲韻は無造作に受話器を置くと、今度は自らの携帯電話を取り出した。

「……黒男さん？ 玲韻です。ええ、あの子が……」

「あつれえ？ お嬢ちゃん、こんなところでどしたの？」

「何しろ、魔王の、呪いだからな。容易く、破れるものじゃ、ない」

しかし大輔は脂汗を浮かべながらも脳天気なまがらみに笑い、他人事のようだ。

「だいたい、熱出して寝込むってどんな呪いのよ？」

苛立ちのあまり尋ねてしまってから、少女は後悔した。

「時間をかけて、じわじわと、体力を奪い、死に至らしめる」

どうやらよっぽど治りたくないとみえる。

「そして、その過程で、近しき者にも、恐怖と絶望を、もたらすんだ」

なんだ。なんだそれは！

何を言っているのだ、こいつは。

ドラマティックであればいいってもんじゃない。

オカルトの世界で呪いと呼ばれるものの一部は催眠術と根を同じくする自己暗示のシステムであるし、精神状態が身体に影響するのは今や常識。

悲観的な発想と妄信が組み合わさればその危険性は明らかだ。

「……どうせ解けないとかいうんでしょ、分かっているわよ」

「いや」

大輔は力なく、しかし確固たる意思を込め、首を横に振った。

「解除法のない、呪いなど、かけられない。逆だよ。恐怖と絶望こそが、呪いの源だ。それが消えれば……呪いもまた、効果を失わる、はずだ」

少しだけ、希望の光が見えた気がした。

彼は死を求めているわけではない。

これからの展開として相応しいのはドラマチックな逆転。そう

「もしかして迷子？」

「家出とかだったりして」

少女は望まれざる客の訪問に不快感をあらわにし、苦虫をかみつぶしたような表情を浮かべた。

「ちっ」

やはり野宿は無理があったか。

生きていくのに必要な現金はそれなりに確保しているし、生き残りのためのスキルも十分身につけている。

例えば、路地裏にこさえたこの段ボールハウスはちょっと自信作だ。材料の特性を完璧に生かして、機能的にはそこの大型テナントより遙かに快適なものになっている。

だが、

世界の闇の側に魅入れかけた連中にとっては、彼女という存在はどうやらよほど魅力的な波長を放っているらしい。何かというところいうのに目をつけられてしまうのだ。

運動神経も頭の回転も人後に落ちない彼女にとっては、ヤンキー気取りの三人や四人、危機の内には入らない。

が、揉め事を起こせばそれだけ足が付きやすくなる。

彼女を追っているのはこの街の表にも裏にも広く情報網を持つ連中だ。行く先々でこうして足跡を残してしまったなら、彼らにとっては彼女の居場所を突き止めることなど容易いだろう。

「やっぱり、安心して身を隠せる場所が要るわね」

「何ぶつぶつ言ってるの？」

「なら俺らんとこ来ねえ？ よかったらだけどさ」

「歓迎するよー」

彼らの口はそう言ったが、表情はそうは言ってない。むしろ手

負いの草食獣を前にした猫科の大型獣といった雰囲気。

ギブアンドテイクが信条だからして、むしろこちらが一方的に歓迎するのを想定するような間柄は遠慮したいところ。

「そんな嫌そうな顔するなよ。せつかくのかわいいらしい顔が台無しだぜ」

最初はみんなそう言うのだ。

自分の容姿が整ってる部類に属するのは知っているが、間違っても「可愛いらしい」なんて形容詞は似つかわしくない事も同じぐらい理解している。

見た目は小柄で華奢ではあるけど、本当に可愛ければ小学校時代のようにダイナマイトだのブラックドッグだの言われない。うっかり本性を見せたが最後、全力で忌避されるのがオチだ。

さて、どうするか。

誘いにのった振りをして巻き上げるほどの金を持ってそうには見えない。

ここで騒ぎを起こすのも得策でない。折角確保した住処を捨てざるを得なくなるどころか、下手を打てばお縄になりかねない。

本当、どうしたものか。

こういうとき、物語の世界ならば展開は決まっている物なのだが。

「こら、君たち！」

そうそう。こういうシチュエーションでのお約束。

「その娘から離れたまえ」

威勢がよい声にちよつとは期待したが、一目で期待はずれを悟る事になった。

平凡だ。

るはずだが、竜胆家からの干渉は一切ない（それを見越して居候しているのだが）。

堂々とした大輔に人を恐れさせるたのは竜胆家、いや、斗流内での順位と発言力を競い合う家々の旧態依然たる体勢だ。

まったく腹立たしい。

大輔は重症の中二病患者である以前に脳天気なガキだが、それでもきつと自分よりずっと上等な類の人間だと思える。

なぜなら彼は被害者であり、睡蓮は逃亡者にすぎないから。

睡蓮が家を飛び出してきたのは、旧弊に従うことを嫌ったからではない。旧弊の中で頭角を現しつつ、それを打破できるだけの輝きを放つ人物を正視できなかった故だ。

幼なじみとして姉のように接してくれた四三玲韻は、睡蓮の無くなった母である志摩の年下の親友であった。

権力争いにうつつを抜かし、斗流の存在意義を忘れ去った無能どもとは一線を画した存在。本物の鬼斬りの一人にして、名目上の珠坂商工会議所会頭である四三揺子の秘書として珠坂の商業を事実上統べる立場にある。

志摩の遺言により、彼女は睡蓮の父である芳村黒男と再婚したのである。

美しく優しくて強く、そして何でも出来る憧れのお姉さん。夫と娘とすべての事後を託された母の親友。嫌いなはずがない。

だが、遠くから見ていると美しい炎は、近くに置くには熱くそして眩しすぎた。

睡蓮の顔立ちは、純粋な和風の容姿を備えていた志摩とはちっとも似ておらず、むしろ玲韻の方に瓜二つと言って良い。芳村は

女の子なら小さいのも武器の一つになるが、コンビニの袋を下げたその少年からは可愛いというよりはいかにも弱々しく貧弱な印象を受ける（仮にのぶ太君と名付ける事にした）。

「なんだー、お前」

「ああん？」

少女に声をかけてきた連中は警戒する様子もない。当然だ。人数と体格で圧倒している。

のぶ太くんはいえ、高圧的な態度とぎすぎすした雰囲気を感じる様子もなく、つかつかと少女の方に歩み寄ってくる。

そして、当然のようにヤンキー連にブロックされる。

「退きたまえと言ったのが聞こえなかったのか？」

体格に反比例するように、のぶ太くんの態度はトゥーラージ。

当然のように、激高したヤンキーの一人（仮にシゲオとしておく事にする）に胸ぐらをひつかまれる羽目になる。

すばん。

手首をとって軽くひねると同時に足払い。

四分の一回転してアスファルトに落ち、失神するシゲオ。

「あれ、バナナの皮でも落ちてたかな？ ついてないなあ、君は」

まさにひみつ道具を出してもらって調子に乗るのぶ太くんそのものである。

「しっ、シゲルに何やりやがった!？」

仮称は偶然にもニアビンだった。

「にやろお！」

「ふざけんな！」

「ぶっ殺す！」

仮称ジャイアント、それからあと二人（ネタ切れなので仮称マ

四三の分家筋であり、遠い親戚に当たるから、そういうことがあっても別におかしくはないが、睡蓮にとっては面白いことではない。

玲韻がスマートな大人の女性として太陽の明るさを放っているのに対し、睡蓮の方は陰気なちんくりんの小娘。しかも鬼の憑かなかった落ちこぼれにすぎない。なまじ似た容姿は、二人の差を余計に浮き彫りにしてしまう。

志摩は玲韻から名前の文字をもらって睡蓮と名付けたそうだが、それもまた彼女の劣等感を強調するだけのものになっている。であるからこそ、そんな経緯も玲韻の顔も知らない大輔に、「フレア」と呼ばれるのが新鮮で心地よかったのかもしれない。

そういうえば、いつ頃からだろうか。玲韻も彼女の名を呼ぶ事はない。

彼女のことだ。睡蓮が可愛い素直な少女を演じていたのにも気づいているのだから、それをおくびにも出さない。

そうした配慮を有り難いと思う一方、同時に不快にも感じてしまう。気持ちを酌んでくれているのを知りながら、見透かされ見下されているように感じてしまう。

そこまで分かっている素の自分をさらせない。貧しく汚い。自分ならこんな娘にはとくに愛想を尽かしているだろう。

生まれ持った才能は仕方ないとしても、人としての器で大きく劣っているのは明らかだった。

だから睡蓮は逃げ出した。

だが、大輔にしても同じだった。

妄想フィルタのなせるわざと思いきもうとしていたが……睡蓮

「そりゃ、呪いだ、からな」

もとよりお世辞にも立派な体格とは言えない大輔だが、この数日で見るとにやつれてきた。

二人の精神に多大なダメージを負わせた解熱剤の経肛投薬すら、一時的にわずかに発熱を抑えたに過ぎなかった。

咳も出なければ身体の痛みも無い。動かしても叩いても痛まない。ただ発熱と衰弱だけ。

強力な抗生物質を要する感染症、発熱を引き起こすホルモンを分泌する腫瘍、自己免疫などの特殊な炎症性疾患。

あるいは、妄想の症状自体も発熱と根を同じくしており、そうした病に起因しているという可能性もありうるのではないか？

ざっと考えただけでも、これぐらいのろくでもない可能性を簡単に思いつき、どれも否定しようがない。

いずれにせよ、既に素人が自己判断できる段階は過ぎている。それだけは確かだ。

「病院に行きましょう」

「現代医学は、呪いには、無力だ。それに俺は、この場を、離れられん」

しかし大輔は、少女の提案を頑なに拒んだ。

「反抗の、象徴が、こんな姿を、見せるわけには、いけないだろう？」

さもあらなん。

大輔の妄想が安定して成立していられるためには、批判的な（ノリの悪い）他者と距離を置く必要がある。

いかに柔軟な修正能力と自己欺瞞能力を備えていても、批判的な指摘が彼にとっての現実を揺るがせようとする力である事にか

ロンとグレーブ）がぶち切れ、のぶ太に詰め寄る。

仲間が倒されたことに怒る反面、倒れた仲間を助けるのが後回しになるのがこういった手合いの通例だ。今回も例外では無かった模様。

隠し持っていた武器をそれぞれ構える。

メリケンサック、ジャックナイフにバタフライナイフ。

「これで正当防衛成立だな」

モヒカン狩りの悪漢に囲まれた某神拳伝承者ばりに指を鳴らすのが、容姿が見合っていないので端から見て滑稽きわまりない。

その素手ののぶ太くんに揃ってけちょんけちょんにノされていくヤンキー連はもっと滑稽。

少女にとって興味深かったのは、その経過だった。

人体の構造を逆手にとり、相手の力を最大限利用するやり方は合気道に似てるが、一人で大勢を相手にするために特化しているいわば格下を効率的に蹴散らすための技。

間違いない。のぶ太が使ったのは斗伏人^{とふふひと}の技。

守護する斗流の技。表だって使うことは禁じられている技術。

「その君、大丈夫か？」

「……まあ、一応」

ちんちくりんには似合わない芝居がかった態度と台詞。いかにも自分に酔っている様子。

「それは良かった。では」

前歯をキラリと光らせ、のぶ太君は片手を上げて去っていくとする。

「あの！」

少女は声を上げた。

わりはない。本能的に避けようするのは当然だ。

「ここは、やはり、ポテトに頼るしかない、な」

「……」

不幸な少年だ、と少女は思う。

妄想の中に生きる彼には、自分自身の不運を正しく認識してそれを嘆くことさえ許されない。魔王だの何だとかよく分からぬものへと運命を仮託し、自らをその有力なライバルになぞらえる。彼自身にとっては悪いことではないのかもしれないが、自分の病気を知らずに未来への希望を語る子供を見ているようでやりきれない気分になる。

しかしそもそも、彼自身には何の咎があるわけでもない。妄想の中に生きてはいても、その命ずるまま他人に襲いかかるわけでもない。魔王への対抗心を口にはすれど、『敵』への対応は極めて鷹揚なもので、睡蓮に絡んできたヤンキー連に対しても怪我をさせぬようきっちり配慮していた。

彼の演じるダイナスは無敵の力を持ちながら、それを振りかざす帝王ではなく、格好付けたが義侠心にあふれる人格者であり、それすなわち彼の憧れる理想の自分の姿なのだ。

確かに大輔は奇怪な妄想を晒す事で他人の失笑を呼ぶだろう。だがそれは決して醜いものではなく、ましてや致命的でなどある筈がない。他人に害を与えるどころか行動規範となりうる妄想など、睡蓮から見れば微笑ましい部類だとさえ思える。

しかしそんな彼は竜胆家に疎まれ、一人このようなところに隔離されている。彼女がここにいた十日強の間、尋ねてきた者は宅配便の配達員ぐらいのもの。監視員は彼女の出入りを確認してい

「どこかで、どこかでお会いしたことありませんか？」

調査せねばならない、というのは半ば以上口実だったかもしれない。

逆説的だが、斗流のシステムに末端に繋がっている者が、こんなつまらない状況で軽々しく人払の技を使うはずがない。

ならば、あわよくば……

のぶ太君が向かった先は、小綺麗なマンションの一室だった。

表札には『竜胆』の文字。

「狭いところだが、まあ入ってくれたまえ」

「おじゃまします」

玄関先に並んでいたのは革靴にスニーカーにブーツ。いずれも一組ずつ、しかもどれも男物。

「荷物を片付けるから少しだけ待ってくれ。今茶を入れるよ」

「いえ、お構いなく」

テーブルのないダイニングキッチン。食器棚も見あたらない。システムキッチン上の食器洗い機に入っている食器は明らかに一人分。

コンビニ袋の中身からも、のぶ太くんは一人暮らしに違いない。少女は内心ほくそ笑む。

二人きりとはいっても警戒するに値しない。状況に酔うことで自分をコントロールするこのタイプは、うまくあしらってさえいれば危害を加えてくることはない。利用するには都合だ。よしんばそういう状況になっても、女の武器が有効に働くだろう。

「そっちに座布団とちゃぶ台があるから、座っててくれよ」

「ええ」

DKと一続きになった一角がリビングになっており、そこには確かにちゃぶ台と座布団が一つ。

壁に寄せられたラックには大型の液晶テレビとサウンドアンプ。ちゃぶ台を囲むように配置された多数のスピーカー。

ゲーム機とそのコントローラ。三つばかり積み上げられたソフットのケース。タイトルはどれもファンタジーRPG。

薄手の本棚にはびっしりとファンタジー物の文庫本と実用新書。籠に山盛りに積み上げられたポテトチップスの袋の山。

壁にかけられた、真新しい珠附紫城の制服。

平日の真つ昼間だというのに外出して買い物。

一人暮らしの男性にしては随分と綺麗に片付いている。

これらの情報より人物像を推定。おそらく実像と大きく異なることはないだろう。それを前提に、のぶ太君への対応法を考慮する。

「待たせたね」

「いいえ」

のぶ太くんの入ってきた紅茶は、かなり良い茶葉を使っていた。煎れ方も手慣れている。

セキュリティー完備のこのマンション、家賃は決して安くはない引きこもりの子息に一人暮らしさせるためにこれだけの金を出せる家。けっこうなボンボンだろう。

しかも普通なら目の届くところに置いておこうとするものだろうが、むしろ隔離されているような節がある。

「俺は竜胆大輔りゅうたんたすくという。残念だが、貴女と会ったのは今日が初めて

熱を出してしまいかねない。大輔が恥ずかしがってないのがせめてもの救いだ。

しかし、気が進まない作業がまだ残っている。

「かっ、か、身体拭くから」

「なあっ!？」

さすがの大輔もこれには顔色を変える。洗面器とタオルを持つてにじり寄り少女に、動けぬ大輔は言葉での抵抗を試みる。

「さて、それは、いくらなんでも!」

「恥ずかしがるな!」

中略。

「……この展開までも、予想し、精神的なダメージを、狙って……なんと、悪辣な……」

頭に濡れ手ぬぐいを乗せ、赤い顔で言ってもまるで格好がつかない。

「屈辱なのはあたしの方よ……」

睡蓮は睡蓮で、拳を握りしめて怒りをこらえている。

自分はなんでこんな事をやっているのだろう？

しかし彼女の奮闘むなしく、

「下がってない」

体温計を見る少女の表情は、半ば心配・半ば嫌悪感で成り立っている。

服用させた解熱剤はそろそろ効力を発揮している時分なのだが。

「下がってない」

再び体温を確認するが、当然数字は変化していない。

甚だ気が進まないが、もう一つだけどうしてもやらねばならぬ事がある

ての筈だ」

表札にもあった竜胆という姓。十家の第六位陸奥家の分家、六道とならぶ大家の一つにその名がある。

斗流の対人武力を統べるのが陸奥家であり、その構成員達は警察・自衛隊はおろか在日本米軍の指揮系にまで深く食い込んでいる。

竜胆がその竜胆ならば、人払儀を使っても何の不思議もない。つまりのぶ太君改め大輔という少年は、斗流の技だけを伝授されながら、その意義を伝えられぬままドロップアウトした。いや、竜胆の恥部としてこうやって飼い殺されているというわけだ。おそらくはその気質故に。

ならば竜胆家の完全な監視下に置かれてなお、斗流の上の方に少女の情報が伝わることはない。逆説的ではあるが隠れ家としては最適といえる。

千載一遇のこの好機を逃す手はない。

「いいえ、きつとどこかで会ったことがあるはずだわ」

少女は押し頂くように大輔の両手を取り、ぐっと顔を近づけた。

「な、なっ?」

動揺する大輔。頬に赤みが差す。

強いウェーブの入ったセミロングの黒髪に深い青の瞳というミステリアス系の容姿にアニメ調の声色を加え、押す。押す。押しまくる。

「私、自分を捜します」

思わせぶりな台詞でも一押し。

「自分探し、だって?」

少女は頷き、そのまま俯く。

「座薬だけは、勘弁なーっ!」

「勘弁して欲しいのはこっちの方だったの!」

中略

「……もうお嫁に行けない……しくしく」

「それこっちの台詞」

看病している睡蓮の方が、病人である大輔以上に疲れ切っている。

つい地が出てしまった。気が緩んでいる証拠だ。

心は冷静沈着に。表面上はあくまでも暖かく甲斐甲斐しく。

こういう類を籠絡するには、おとなしく思いやりがありよく気がつく（非現実的な）少女を演じるのが一番なのだから。

「おのれ、魔王め! これほどの、屈辱! ゆるさん、絶対に、ゆるさんぞ! ししくしく」

しかしまあ。台詞と態度がなんと激しく解離している事か。

縮まらないことおびたしいが、こうもぐだぐだになっても自己欺瞞を続けられるのには、呆れるを通り越して少しは感心しくもない。

先ほどからの失言もスルーされている模様。何しろあらゆる認識に妄想フィルターが掛かっているわけであるから。一端昔の仲間として認識されてしまえば、何をやろうが好意的に解釈されるのかもしれない。

いい加減、態度を取り繕うのが馬鹿馬鹿しくなってきた。

さらに翌日。

「なんで、下がないのよ……」

るぐらいのことはしてくれても良いでしょうに」
心配して迎えに来るまで期待はしないが、いくら何でも薄情ではないだろうか。

「ただいま帰りました」

ドアを開けて帰宅の挨拶をしたが、返事無し。

「ダイナスやーい」

靴を脱ぎつつもう一声かけるが無反応。

「こらダイナス、ふざけんな、返事しなさいっての！」

怒りにまかせ彼の部屋に踏み込んでみると、予想に反して部屋は真っ暗で。

「ダイナス？」

一步踏み出すと、つま先にぶつかると何か柔らかない物体。

「？」

手探りで灯りをつけると、

視界に飛び込んできたのは、倒れ伏せる少年の姿だった。

「大輔っ!？」

「これぞまさに不摂生の賜といったところですか」

「いや、これは呪いだ。間違いない」

熱に浮かされていても発言内容に大差がない。部屋は片付けられても頭の中は整理できないとみえる。

「とうとう、どんな手を使っても俺を排除する気になったらしい。界を超えての呪詛ともなれば、魔王自身が音頭をとり千人規模の魔導師が陣を組んでの大魔術に違いないな。男一人葬るために、魔王としてのプライドまで捨てたってわけだ」

「二週間より前の記憶がないんです。自分の名前も覚えてません」

「……」

普通なら完全にアウトだが、こういう相手には斜め上からのアプローチが有効なはず。

「気がついたら、道を歩いてました」

絶妙なタイミングでがっ、と顔を上げる。

「そして、今日初めて！ 知っている顔に出会った気がするんですっ！」

これでどうだ、と少女が見上げた先には、赤面ではなく蒼白があった。

斜め上からのアプローチは斜め下からのリアクションで返された。

「……若すぎる。でも姿が変わっているのは俺だって同じ事だな」

少女の手が押し返される。

大輔は窓際に立つと、ブラインドの隙間から、向かいの電柱の陰を確認する。

そこには帽子を深々とかぶったコート的人物。自分は不審人物だと全身で絶叫しているようなものだ。

「見ての通り、俺は監視下に置かれている。あれは撒いたように見せかけるための見せ要員だが、実際には特殊部隊一個小隊が常にこの建物を包囲している」

あまりにも予想外の展開に、少女は哑然とするほかなかった。いや、それは竜胆家の手の者だろう、と突っ込むわけにもいかない。

突然饒舌になった大輔はさらに続ける。

「それは俺が奴らにとって潜在的脅威だからだ。奴らは俺が往事

「いいから寝てください。ガンガン体力回復させないと削り倒されちゃいますよ」

「こんな事もあろうかと思ってな、ビリドキシン含有食を大量に買い置いてある」

そういう偏った食事が一番の元凶のような気がするが。

「はいはい。イモばっか食べてないで、総合ビタミン剤と風邪薬も飲んでくださいね」

「ああ」

この時はまだ睡蓮も高を括っていた。風邪など数日で回復するに決まっていると信じて疑わなかった。

翌日。

「熱、下がりませんね」

下がるどころか、むしろ上昇している。

「レトルトで申し訳ありませんけど、これ食べて薬飲んで寝てください」

「わるいな、おっとと」

スプーンを受け取り損ない、取り落とす。

この体温だ。強烈な倦怠感でまともに身体が動かせないだろう。仕方ない。

「はい、口開けてください」

「たまには、寝込んでみる、もんだ。まさか、あの、フレアに、食べさせて、もらえるなんて、な」

「無駄話してる余裕があるなら、一回でも余分に噛んで」

こういう作業はさっさと機械的に終わらせないと、自分の方が

の力を取り戻すことを何より恐れている」

少女は真剣な表情で相づちを打つ。他にリアクションのとりようがなかったからだ。

「俺はかつてグリマエルのオイレン大陸にその人ありと言われた、鍛冶屋にして剣士にして武闘家にして魔術師だった。だが、一騎当千の俺の力は、帝国の最深部に巣くい大陸を闇より統べる魔王にとっては、目の上のこぶだったんだ」

……戦力外通告の原因がはっきりした。

典型的な中二病。しかも相当の重症。

「俺は単身で魔王に挑み、壁となって立ちふさがる数万の軍勢を突破した。だが、世界最強と言われる騎士団との戦いで全身に傷を負った俺には、魔王に対抗するだけの力は残されていなかったんだ。俺は魔王の片目を貫いて息絶えたが、魔王はその片目と引き替えに、再びグリマエルに転生する事を許さぬ追放の呪いを放った。そして俺はここ珠坂で竜胆家の子として生まれ変わり、何もかも忘れ平和に生きていた。数年前にすべてを思い出すまでは」
次々に繰り出される痛々しい妄想の数々に呆れかえりながらも一切顔には出さず、少女は先を促した。

「あの頃の俺には、もしものために技術のすべてを伝授した弟子がいた。が、やはり魔王の目を逃れることは出来なかったんだろうな」

と、大輔は少女の両肩に手を置く。

「が、奴はただ一つミスをおかした。魔王は俺たちの再開を阻止できなかったんだ」

笑えるのを通り過ぎて、そろそろ本気で怖い領域に達してきた身体と頬がこわばるのを懸命にこらえ、努めて真剣な顔を保と

うとする少女。

その努力を知って知らずか、スイッチの入った大輔は妄想のありったけをぶちまけ続ける。

「前世での俺の名はディナシウス・ユーリヒト・パーシオン。おそらく君はフレア。俺の一番弟子、エルフレイアだ」

ダサイ。決定的にセンスがない。

名前が長ければそれで格好いいと思っているのだろうか。

「俺は生まれ変わってこのファミリーで育ったが、フレアは直接転送されたに違いないな。その衝撃で記憶を失い、肉体年齢も低下しているんだろう」

なんと見事なご都合主義の後付解釈だろうか。

はつきり言って気色が悪いが、中二病患者のこういう非科学的な柔軟性は鬱陶しいと同時に、家主の特性としてはこの上なく都合だ。便乗しない手はない。

「……ディナシウス……ダイナス？」

「その呼び方、やっぱりフレアなんだな！」

実に単純。アドリブに合わせて勝手に妄想を拡張・改変してくれる。

「ううん、わからない。ただ口から出ただけ……」

「グリマエルの記憶を持つ俺と接したことで、記憶を取り戻しかけているんだろうな」

ここが押しどころと判断した少女は大輔に駆け寄ると、胸の前で両手を組み、精一杯可愛らしい仕草で見上げた。

「……あの、お願いが」

「待てフレア、皆まで言うな」

大輔は少女を置き去りにして台所に向かうと、冷蔵庫の奥から

十数分後。商工会議所ビルの玲韻の元には解析結果が届いていた。

いつもの事ながら仕事が早い。

鬼の死因はなんと心筋梗塞であった。

元々の不摂生が祟ったか。変身に伴う体組織の急激な増殖と同時に冠動脈硬化が一気に進行、運動負荷で急死に至った可能性があるとのこと。

つい先だってまで不幸と死の散布は収まってい筈だが、墮鬼化を誘うどころか鬼の命まで奪うとは。一体あの娘に何が起こったというのか。

「砂越周辺の急病人や死者の最新データをお願いします」

案の定だ。情報のすべてはただ一点を示していた。

災いの中心には竜胆の少年の住まいがある。記憶障害を患っているとかで、竜胆家継承の適正無しとされている人物だ。

まったく、無自覚な人間と察しの悪い人間が多い。その分、分かっている者ばかりが面倒を背負い込む事になる。

この部屋の本当の主などは、そうした齟齬からのトラブルを心底面白がっている模様だが……事件の裏で暗躍したり、中途半端に知識を与えて混乱させるのを趣味にしているような人物にあっては、特に苦にもならないのだろう。

この深刻な状況を楽しめる境地に至らない者にとっては精神的にきつい。今回は身内だから尚更だ。

あの人のことだから、こうして玲韻が苦悩する様子さえも楽しみの一つなのだろう。今頃ポテチ片手に高みの見物を決め込んでいるに違いない。

……ここで地団駄踏んで見せても掃子(そうじ)さんを喜ばせるだけか。

取り出した金属片を投げ渡した。

「っと！」

カード状の金属片は、おそらくマンションのキー。

「必要なここを好きに使うといい。それから、現時点では記憶を取り戻したそぶりを見せない方が良いでしょう。俺も表向きは知らぬふりを通していい。見ただろう？ こちらの世界にもヤツの息の掛かった者は多数いる」

少女はつり目をまん丸に見開いて、こくこくと頷く。

あまりに容易に目的を達せられた事に本気で驚くしかなかった。「なに、俺たちが往事の力を取り戻すまでの辛抱だ。それまでは、たまたま意気投合してルームシェアリングしているということと押し通す」

「は、はあ」

そろそろ顔が引きつるのを抑えるのが辛くなってきた。

おそらく、ここで露骨に軽蔑の表情を浮かべてみたところで、都合の悪い情報は認知されないのだろうが。

「とにかく、また会えてよかったよ、フレア」

メンヘルの坊やにしては笑顔は意外に見られる事に感心しつつ。少女はうつむくと、今度こそ本心からのほくそ笑みを浮かべた。かくして彼女は仮住まいとともに、妄想の中で生きる相棒を手に入れた。

十一日。珠坂駅前のバス停で三十代の青年が発作性不整脈で急死。

十二日。カラオケボックスで出火。建物の被害は警備だったも

ともあれ、所在は特定した。そしていつでも介入できるだけの体勢を整えているが、この状況で下手に介入する事の危険性も以前とは比較にならない。

力の変動の原因を突き止める事が先決だ。

だが、次々に広がる不幸と悲劇の輪を座して見ている事しかできぬとは。いかにももどかしいことだった。

無事に大輔のマンションへとたどり着く事に成功したのは幸いだった。

傍目から見ても仕事熱心とは言い難いお馴染みの見張り員はともかく、明らかな追跡者の気配はない。

間一髪脱出に成功したようだ。

「ふう」

エレベーターから降りた途端に何となく安堵を覚えた。

同時に理由の分からない苛立ちが沸き上がってくる。

「……何だっけの」

もう八時を回っているというのに灯りがついていない。

夜になったのも気づかずMORPGをやり続けているに違いない、と少女は推測した。

魔王への反撃のためのシミュレーションに好適だそうで、連日の廃人ブレイの甲斐あって今やダイナスは往年の名声を取り戻しているらしい。あくまでもネット上での話だが。

「まったく、ヒトが絶体絶命の時に何やってんのよ」

理不尽と分かっていると言わずにはいられない。

「師匠で相棒を自称するなら、ピンチを察知して颯爽と駆けつけ

目前を通り過ぎた鬼の顔が、鬼が牙を見せて笑った。それで失敗を悟る。

槌のごとく組まれた鬼の両手が落ちてくる。

受け流しようがない。頭上に組んだ両腕に気を集中させるが、おそらく防御を抜けてくる衝撃だけでも致命傷となる。

「大輔っ！」

迫る敵を目の前にして、目をつぶった。

あの妄想男の言うとおりであった。危険なんてどこにでもある。

町の中で怪物に襲われることだってあり得たんだ。

その可能性を知っていてなお、心配する彼の言葉を内心で笑い飛ばしてしまったのが悔やまれる。

ああ、でももう手遅れだ。

「ごめんね、大輔……」

ぐしゃっつ。

思い出が走馬燈のように駆けめぐ……らない。一向に浮かばない。

「あれ？」

痛くもかゆくもない。

もしかして、生きている？

目を開いてみると、足下の舗装がごっそりとえぐり取られていた。先ほどの音はこれであつたようだ。

だが、少女の身にはいささかの傷もない。

この距離で外した？

吊り目をまん丸に見開く睡蓮の前で、鬼の巨体がぐらりと傾き、次の瞬間崩れ落ちる。

のの一酸化炭素中毒で従業員が一名死亡。

十三日。裏路地にて交通事故発生。被害者は男子学生風三名。全員即死。

芳村玲韻はため息をついた。これではまるで死神の住処だ。

奇妙なことに、統計学的も異常なこの死亡事故の連続は、十四日以降ぱったりと途切れている。散発的な事故はあっても、命に関わるような大きな事故は起こっていない。

十六年前の出来事に酷似している。チャーカーを持って行ったからこの程度で済んでいるのだろうか、原因は彼女である可能性が極めて高い。

そう考えて駅周辺を集中的に搜索したが、未だ発見に至っていない。

彼女の為人を知っていれば、亡くなったという線はまず考えられない。たくましさや強運については折り紙付きだ。

ならば珠坂を離れたか。何らかの要因で力が弱まっているのかとすればより広範囲の、より軽い事件事故の記録を当てる必要があるだろう。

少なくとも彼女の発見がより困難となったのだけは間違いない。一国も早く事態を收拾し、これ以上の被害発生を抑えねばならない。会頭より実務を任されている立場上も、それ以上に個人的にも。

「……ごめんなさい、お志摩さん。もう少し掛かりそうよ」

大輔は大変優秀だった……家政夫としては。

料理・掃除・洗濯いづれも手の打ち所がない腕前。部屋が完璧

『ぐはあつ、ぐおおっ』

先ほどまであれだけの猛威を振るっていた暴力の塊が、アスファルト上を転げ回りながら苦悶の形相で胸をかきむしっている。

「何よ、これ。どうなってるって言うの？」

独りごちる少女の前で、鬼の顔色がみるみる悪化していく。この調子だともう数分で青鬼になるだろう。

理由はよく分からないが、どうやら走馬燈には早すぎたとみえる。

今回もまた、天運は睡蓮を見逃してはいなかったようだ。

我に返った少女は状況把握に努める。元々人通りの寂しい道だ。辺りには誰もいない。

先ほどから携帯電話で自宅をコールしていたので、この場所は既に伝わっているはず。早ければ早期対応部隊が数分以内で到着するだろう。

ここは三十六計逃げるにしかず。

足取りを追跡されないように携帯電話の電源を切る。

帰る先は、決まっていた。

『小隊長よりH.Q. 砂越三丁目にて221。デルタ・タイプを一体確保しました』

「被害は」

『あー、舗装が多少損壊していた程度です。到着時、目標は既に活動停止状態でした』

『ではそのデルタを回収して分析班に。後は任せます』

『了解。回収だ。警察が動く前に痕跡を消し去るぞ』

に綺麗に保たれていたのは大輔個人の腕前だったわけだ。

登校拒否と中二病とボテト中毒にさえ目をつぶれば、悪い人物ではない。むしろ、家事能力の欠損した少女の同居相手としては実に都合が良かった。

「フレアは、この街が動的に変化していることには気づいているか？」

「え？」

「町に出る度に建物や店の配置、酷いときには町の名前まで記憶と食い違う。二人兄弟がいつの間にか三人兄弟になっていた事もある」

「それは、そうでしょうね」

引きこもりにそういう発言をする資格はない。

「魔王は禁じられた超古代の呪術を用いてこのファリメウルの歴史に干渉し、自らが顕現しうるに適した世界へと作り替えようとしているんだ」

「……それが本当なら、今頃もっと騒ぎになっていそうなものだけれど」

「なぜならば、世界が人間の記憶ごと改変されてしまっているためだ。俺は長きにわたる魔王との戦いの中で、ヤツの力に対する抵抗力をある程度備えるに至っているからな」

「なるほど。さすがダイナス」

少女は不覚にも少し感心した。ここまで柔軟性の高い自己欺瞞能力は素直に羨まれる。

「買物物についでに観察してみる事にするわ」

だかといって、聞くに堪えない発言のイタさが和らぐわけではない。やんわりと打ち切りを通告する。

「すまない。本来なら俺が行くべきなのだが、本日は日本中に潜伏する同志達との長期的反抗計画のためのネットワーク会議が予定されているため自由が効かない」

ネットワーク会議、またの名をメンヘル妄想チャット。一度覗いてみて激しく後悔した。

「任せて。ダイナスは完全に危険人物としてマークされてるけど、私ならもう少し自由に動けるから」

毎日たっぷり三時間かけて部屋掃除に精を出してる分際で、ただかばかりの時間が捻出できない筈もないのだが。

通販で入手困難な物のまとめ買いにたまたまぶつかる事が出来たのは、少女にとって幸運だったと言えるだろう。

「分かった。だが外は危険にあふれている。何か異変があったら電話するようにな」

「ええ」

連絡に必要な携帯電話は既に入手済み（大輔名義）。

「それから、ポテトだけは切らさないように頼む。同じくグリマエルを追われた同志の研究によれば、ジャガイモに含まれるピリドキシンは強力に魔王の魔力を減衰させる効果を持つそうだからな」

「了解。行ってきます」

「とにかく、くれぐれも、気をつけろ。手下の間では力及ばぬ事は既に知られてしまったからな、今度はどんな怪物を送り込んでこないとも限らない」

「肝に銘じるわ」

共生関係を円滑に続けるためには、ツッコミを我慢する事もまた必要だ。

素手で鬼に対抗できるのは鬼だけ。すなわち、芳村睡蓮の分不相応な幸運もこれまでということ。

今頃反省しても遅いが、あまりにも無防備だった。今日だって普通なら選択するはずのない人気がない道を選んでいた。

素人に毛が生えたほどの力を身につけているだけで、どれほど世界を甘く見てきたか。

この世の闇に闇に人を食らうものが潜み棲む事を熟知しつつ、自らに害を為す可能性には堅く目をつむっていた。

自分が死んだら大輔は泣くだろうか。

いや、それはないだろう。元の世界に戻ったとかなんとか説明をつけて、心の平穏を保つに違いない。

父は小揺るぎもしないだろうし、あのひとに至ってはむしろ肩の荷を下ろすかもしれない。

だがそれでいい。

母の死が少女の心に傷を残したように、死してなお誰かを縛り続けるようなのは願い下げだ。

ならばせめて、斗流の一員としての責任を果たそう。

大輔にたかった携帯電話で、自宅の番号をコールしておく。これで音声は伝わるし、場所を逆探知もできるだろう。

自分が及ばずとも、あの女ならば間違なくアレを滅ぼせる。

「私が欲しいんなら、かかってきたら」

回避に最適化された廉貞の構えをとる。対人戦技術である人払儀で酒呑童子級の鬼に通用しうる唯一の技、流水。

時間稼ぎにしかないだろうが、この技は足止めこそが最大の目的だ。

宿は確保した。しかし引きこもりにつきあわねばならぬ義理はない。

あてはないが目的はある。何はともあれ動かねば始まらない。とりあえずは駅を起点に。まずは東から搜索を開始する事にした。

変装。といえど大袈裟に過ぎるが、髪型を変えるだけでも結構印象は変化するものだ。

跳ねて目にはいるのが嫌で短く切った前髪はいじりようがないが、ウェーブの強い特徴的な髪は三つ編みにして押さえ込み、白のニット帽に押し込む。丸いフレームの伊達メガネでつり目の印象を和らげる。

そして、いつもなら絶対に着ない安物のピンク色のニットワンピース。

普段の姿のインパクトが強いと、若干地味にただけでもまるで目立たなくする事が可能だ。

経験上、知り合いに見られたところでまず見破られることはない。

「あらこんなところに睡蓮ちゃん」

明らかに自分にかげられた声を無視して少女は歩を進める。

「ねえねえ睡蓮ちゃんでしょう？」

幾分歩を早める。

「よ・し・む・ら、す・い・れ・ん・ちゃん！」

少女は急に振り向くと、声の主へとつかつかと歩み寄り、手のひらで口をふさいだ。

相手はいわばヒトの知恵と欲望と狂気を備えた巨大なヒグマ。

だが素直に食われてなどやるものか。

体力でも俊敏性でも持久力でも遙かに劣るが、こちらには二千年の蓄積と技術がある。

逃げることも勝つことも出来ない場合の方策は確立されているし、強力な鬼とて無敵ではない。鬼斬りが到着すればこいつに生き残る統べはないのだから。

鬼が咆吼する。

ばしっ。

まさに熊手のような爪の一撃を、掌に最大限に集中した気を盾として受け流す。気闘法で身体強度を強化していても、これだけの質量差でまともに受けては吹っ飛ばされる。

ばしっ。ばしっ。

二撃、三撃。

それでも、吸収しきれない衝撃の浸透によって、壁際へと押し込まれてくる。

こいつ、戦い慣れしてる！

後退するスペースを奪っておいて、下段からのすくい上げるような一撃。辛うじてはじいたは良いが、少女の身体は宙に巻き上げられる。

この戦術、格闘ゲームかっ！

巨大な角を振るっての頭突き。大輔の部屋の古い漫画にあった、ハリケン何とか、って技を彷彿させる。

「っとお！」

崩れた体勢で、かろうじて角をつかむ事に成功、それを基点に身体を下方に逃がして強引に着地をはかる。

いのだが。

「全然合わないってのっ！」

棍棒をかわし、伸ばした腕をとりつつ懐に入り込む。ずどん。

小柄な少女にとっては巨体と言っているサイズのオタクを、背中からアスファルトに叩きつけた。

動きとしては単なる一本背負いだが、斗流にて黄金と通称される気闘法の要素を多分に含んでおり、とった腕の経絡から強引に気をねじ込む事で身体の制御を奪っている。相手の筋力まで味方につけた投げの破壊力は体格差を補ってあまりある。

「い、いたいよ、いたいじゃないかあ。投げたね、親父にも投げられた事ないのに！」

「そんなん普通はないって！」と突っ込む余裕はなかった。

今ですぐに起き上がって普通に喋れる？

痛いとかなんとかではなく、まだ全身にしびれが残っているはずだ。

受け身をとるところか身構える事さえ許さず、頭から落とせば文字通り必殺になる技。まともに入ればプロレスラーでも一撃で昏倒させうるというのに。

「へへへ、強気なお人形さんは大好きさあ。えへ、えへへ」

まともじゃない。

今のが効かないとすれば、それは身体に人とは違う要素が混ざっているという事だ。

案の定、下品な笑いをたたえた襲撃者の瞳が爛々と金色の輝きを放ち始める。

脂肪だらけの腕が筋肉質へと変貌し、隆々と盛り上がる。

そのまま、その小さな体躯には似合わぬ力で路地裏へと引っ張り込む。

「もがががうういえうあんあ」

「子供ですかあなたはっ！」

少女に声をかけた和装の婦人は、我が意を得たりとばかりに上品な笑みを浮かべる。

「ほらやっぱり睡蓮ちゃんだ」

「二度言わなくて結構ですから。で、それは誰のことですか？」

「いやあねえ」

和装の婦人は袂で口元を覆い、右手をひらひらと扇ぐ。いかにもオバサンくさい仕草だが下品さはない。

「あなたの事じゃないの芳村睡蓮ちゃん」

親戚以外に（親戚を含めても）これほど馴れ馴れしい人物の事は記憶にない。

「今日は黒い洋服じゃないのね？」

少女は観念したか、素性を否定する事は諦めたようだ。

「こちらはお姉さんのことをこれっぽっちも存じ上げないのです」

「意訳…おばちゃん誰？」

「おばさんでいいわよ」

「……ではおばさまで」

心を読まれてるのだからか。

「わたしは南山深池よー。みっちゃん、て呼んで」

「いえ、名前を知りたいわけじゃありません」

「ところで、今日は日曜日だったかしら。家にこもりっきりだと曜日の感覚がなくなってしまうのよね」

「何？」

精神構造どころか、身体すら既に何かヒトとは別のものになりつつあるように見受けられる。

二千五百年以上もそういうものを相手取ってきた一族の一員として、少女はそうした異常の存在を熟知していた。

こいつ『堕ちて』いる!？」

「あひや、あひやひや、あひやひやひやひや！」

変化は加速度的に進んでいく。

古い漫画の一シーンのように、アニメ柄のシャツが破れてはじけ飛ぶ。

もともと大きかった身体が、さらに大きくなっていく。そして縦にも。

その醜惡な精神を反映して、膨れあがり歪みそしてねじ曲がった姿は身の丈三メートル近い巨人へと変じていた。

そのこめかみには二本の角。たちまち見事な鬼の出来上がりというわけだ。

「参ったわね」

まさかこんな大物のキャリアが監視の目を逃れていたとは。

そしてよりにもよって、目の前で墮ちられるとは。

考えたくはないが、さっきの一発で最後のスイッチが入った可能性が高い。

ついてない。

これまでの幸運すべてをキャラにするぐらいの不運だ。

人払儀ではもとより無理。少なくとも相当の武器を用いねば勝負にならないだろう。このクラスを確実に滅ぼすには、少なくとも髭切あたりを持つてくる必要がある。

「……チッ」

嫌なことに気づかれた。

「おばさんの気分転換に少しつきあってくれと嬉しいわー」

婦人の勢いは有無を言わせない。脅迫のように聞こえなくもないが、子供のような円らな瞳は興味にキラキラ輝いている。

正体を知られている相手は無碍に扱おうと、どこから情報が伝わるか分かったものではない。

下手に逃げ出して怪しまれるよりは、丸め込むチャンスを得た方が得策と少女は判断した。

「ええ、喜んでお供します」

せっかく脱出に成功して隠れ家も確保したというのに、こんなところで下手を打って燃やされるのは御免被りたいところである。

「素直な子は好きよー、うちの子もとってもとても素直で私に似なくてかわいくてかわいくて」

いかにも可愛い系の婦人が口にするという違和感が感じられる台詞だった。

しかも少女にとっては、そんな類の評価を受けた経験は初めてである。「何をたくらんでいるのだろう」と警戒してしまう。

そんな人間を素直とは呼ばないだろう。まあ確かに自分に対しては素直かもしれないが。

少女が連れてこられたのはいわゆる山の手の一角。旧家の並ぶ旧珠坂とは川を隔てた高台にある、小さな庭のある白い一戸建て。これで白い大型犬とつばの大きな帽子をかぶったお嬢様がいれば完璧だ。

表札には『南山』。

つまり婦人の家にまで引っ張ってこられた事になる。

ここまでの話題は漫画とアニメと特撮。

正確にはひたすら深池がしゃべり続けただけだが、その考察は深く濃く、多面的な知識と見識に裏付けられており、そして限りなく意味がない。

真面目に相手にするほどの内容ではないというのに、適当に相手にしておくには複雑な思考を要求される。相手にしているとにかく疲れる。

きっと大輔と気が合うだろう。いや、会わせたら恐ろしいことになりそうだ。

「ささ遠慮無く入って入って睡蓮ちゃん」

「……おじゃまします」

どうにも真意が読めない。

勧められるままテーブルについた少女は、ここで再度尋ねることにした。

「以前どこかでお会いしましたでしょうか、おぼさま」

「七年前に新聞社のパーティーで一度ね」

ボランティア賞だの文学賞だのそういった類のイベントだろう。確かにそういう会合に飾りとして引っ張り出された事は何度かある。

しかし少女の方に目の前の婦人に関する記憶はない。婦人の言葉が本当だとして、普通はそんな昔に一回会っただけの人間をそうそう覚えていてるものではない。

「申し訳ありませんけど、覚えがありません」

「おぼさん物書きの端くれだから記憶力には自信があるのよ」

を悟る。

ダメだ。

外面は取り繕えても内面のコントロールがまるでなっていない。

だから少女はいつも失敗する。

これまでは持ち前の強運に助けられてきたが、いつまで続くかわからない曖昧なものに頼るわけにもいかない。

そして舗装の角につまずいた。

今回も、第一撃をかわせたのは偶然だった。

「！」

運動神経にはいささか以上に自信のある睡蓮がこんな平地で転ぶ事など、通常であればあり得ない。

案の定だ。

体勢を崩した少女の頭上を、黒い塊が音もなく掠めていった。

背後からの攻撃。

「くそっ」

襲撃者はすかさず第二撃を繰り出してくるが、既に体勢を立て直していた彼女は、わずかに首を傾けただけで余裕を持って回避する。

少女とて斗流の末席に身を置く者。奇襲ならともかく姿の見えている一般人などに不覚をとることはない。

「なな、なんで、なんでボクから逃げるのかな」

「いや逃げるから、普通」

襲撃者はいかにも運動不足な体型で、大輔とはまた違ったタイプの暑苦しいオタク風。

得物は砂を詰めた棍棒。いわゆるブラックジャック。

外傷を残さずに衝撃を与えるための武器を使っているところを

物書きは関係ないと思ったが、少女はふと気になって尋ねてみた。

「どんな本を書かれてるんですか？」

「最近だと『黒剣の娘達』とかねー」

大輔の部屋にあった、表紙にカラフルなイラストが描かれた文庫、いわゆるラノベのシリーズにそんなのがあったはず。

他人の作品には点の辛い大輔が絶賛して語りに語っていたタイトルの一つだが、粗筋を聞いただけで読む気が失せるような陰鬱で絶望的な話だった。

そんな重苦しく激しい物語を、こんな優しい婦人が書いてるとは夢にも思わなかった。

「それと、一番有名なのは『珠坂の女神』かな」

「!?」

十家の一端に籍を置く者として、少女はそのタイトルをよく知っていた。

女神に願をかけた結果、望まぬ形で夫の血を引かぬ娘を授かった女性の物語。

その内容で世間を大いに騒がせた問題作は、同時に珠坂十家の間でもまた物議を醸しまくった筈。

作者の名前が確か……

「藍池美智緒先生？」

「びんぽーん」

軽い……

軽すぎる。

本当に子供のようなヒトだ。

「はいどうぞ、粗茶ですが」

見ると、殺傷目的の通り魔とは趣旨が異なるようだ。

「い、言うことを聞かないお人形さんには、お仕置きが、必要なんだな」

制御を失って暴走した欲望が生物としての最低限の性能にまで影響を与えている。目の前の相手が狩りの対象となりうるかの判断すら出来ないと思える。

星回りか何かの影響だろうか、最近こういう輩が増えている話は耳にしていたが。敷かれたレールを踏み外すのは個人の勝手としても、同種を攻撃衝動の対象にするというのは群体生物の一員としては相当に逸脱している。

そうした逸脱者を排除するのがこの国の免疫系たる斗流人払の役割なのだが、こうして真正面から悪意をぶつけられては人払儀程度では生ぬるいと思える。

「そうね。お仕置きが必要かもね」

あの女や斗流十家の各本家の高位鬼憑き達のような特殊能力を持つていれば、この馬鹿者に死より恐ろしい局限の恐怖を味わわせる事も可能だろうが。

反射神経以外に何の特技もない睡蓮には、この馬鹿者と同じリングでどつき合うしかないわけだ。

「き、きき、気が合うなあ、へへへへ」

襲撃者は、にやありと満足げに笑った。おぞましい。

できれば鬼斬儀の必殺技の二三発も叩き込んでやりたいところだが、残念ながら少女は純然たる技術である人払儀しか使えぬ只人であって、バケモノじみた鬼斬り達から見れば一人の落ちこぼれに過ぎない。

まあ、それでもこんな素人に相手後れをとることは考えられない

退屈な偶然の積み重ねで運命が大きく揺り動かされる。そういう点では、本物の悪質さは物語の女神をさえ上回るとみえる。つまり我らが愛すべき生徒会長様は、人目と後ろ指を恐れるあまり、こんなにも真っ直ぐに歪んでしまったのだ。

そんな彼女が、何の気の迷いだろうか。自らのルーツと真っ向から向き合ってみたり、生徒会長などという直射日光を浴び向かい風のまともに当たる場所に身を晒している。

ならばきつと。南山晴蘭は。かつて自らの魂を封じた牢獄の鍵を再び見つけられたのだろう。

いまだ闇の中を彷徨っている睡蓮にとっては羨望を禁じ得ない。だから少女は安住の場所を離れ出奔してまでここにいる。行く手を遮る闇を払う鍵がきつとどこかで見つかると思信じて。

だがもしも、彼女自身が闇の源であったなら。求めて止まぬ真理の光を浴びた途端、ただただ醜悪な本性が白日の下にさらけ出されるといふ、どうにも救いようのない結末が待っているのだろうか。

「どうしたの睡蓮ちゃん。顔色悪くない？」

「あは、もともとですよー」

ここしばらくは妄想入ったアホのせいで落ち込む暇もなかったが、ちょっと気を抜くとどうしても悲観的になる。根本的にそういう質なんだろう。

それにしても。二人揃ってなんと目ざとい事だ。

何年も前に会っただけの少女を的確に覚えていた母親。事務的な会話をかわす程度の間柄であった後輩の欠席理由まで把握している会長。

「あ、いただきます」

粗茶どころかなり良い茶葉を使っているようだが、煎れ方がまるで違ってない。深池自身を彷彿させるちぐはぐさ。

「それで、その藍池先生が私なんか何のご用でしょう」

「あら、さっき言ったでしょ。気分転換につきあって欲しいって誘いかけの方便ではなく、しっかり本気であったとみえる。

「引きこもって文章ばかり書いてると、時々ヒト恋しくなるのよね。担当さんは昔は打ち合わせにつきあってくれたのに、最近じゃ何でもかんでもメールですましちゃうとするし」

ほんの三十分やそこらでこれだけ疲れるのだ。この調子で何日も続けられたら、いかに仕事でも距離をとりたくなろうというものの。

「はあ……」

少女が反応に困っていると、ピンポン。

今度は口まねではなく、本物の玄関チャイムの音色が応接間に響いた。

「今度は本物のお客さんじゃありませんか？」

若干の皮肉を込めて少女は言う。

深池は壁掛け時計を見上げ、首を横に振った。

「大丈夫、この時間なら必要ないから」

五時半きっかり。

「？」

少女は疑問に思ったが、その意味はすぐに分かる。

「ただいま帰りました」

つまり訪問者は家人であったわけだ。

ここまで追っ手をやり過ぎてきた変装をただの一目で看破するわ。ちょっと油断して顔に出してしまった瞬間にそれを指摘するわ。

それが才能なのか経験なのか技術なのかは知るよしもないが、一つだけ確信したことがある。

外見は全然似てないが、この二人は間違いなく親子って事だ。

なら、血が繋がっていない筈なのに瓜二つでしかも出来の悪いデッドコピー、なんてのはどうなのか。

南山家を辞してからの帰り道も。睡蓮はつらつらとそんな事を考え続けていた。

天は少女の惨めさを強調せんがため、彼女をあてがってきたのだろうか。

ならばそれは完璧に成功している。

そのまま悲観的思考の無限ループにはまりこみながら、頭の半分ではまた別のことを考えている。

余計なことを考える間を与えないという意味では、あの妄想バカにも衣食住以外の存在価値があったのかもしれない、などと益体もないことばかり。

しかも考えているようで実際には空回りしているだけであり、だからこそ余計に堂々巡りになる。

そして、全力で思考力を使っている分、本来必要な注意力が不足する。脊髄反射に任せて自動操縦で行動しているようなものだ。

背筋を悪寒が走り抜けるに至り、遅ればせながらようやく失敗

自宅でチャイムを鳴らす理由がどうにも理解できないが、そこらへんは家それぞれの習慣なのかもしれない。

「お母さん。在宅時にも鍵はかけてくださいと何度言ええば」

帰宅するなり小言が始まる。

「あら？ 閉めてなかったかしら」

「大雑把すぎます。そろそろ年齢相応の落ち着きというものを……」

そこまで一息に言うってから、予想外の人物の存在に目を細める。一種殺気にも似た空気の変化に、少女は身体をこわばらせた。

「芳村さん、病欠じゃなかったの？ どうしてうちに」

「……会長？」

珠附紫城高等部の制服を身につけた、大人びた顔立ちの長身の娘。

黒髪と茶髪のどちらともつかない中途半端な色の髪。それを二つに分けて折り返して結っているのは、いかにも飾り気のないただの黒いゴム。しかも半端な高さのため可愛くも色っぽくもない。そして制服と同色の焦茶のベレー帽がまた地味だ。彼女に会うまでは、紫城に制帽なんてものが存在すること自体を知らなかった。

地面からの距離で設定されたスカート丈の規定も、守る守らない以前の問題でほとんど知られていない。しかもこれがまた非常に中途半端な長さになる。

……

生徒会長の格好を気にしている場合ではなかった。この場合は

むしろ自分の格好の方が問題である。

変装しているというのに一目でモロバレしてしまったのだから。だが、対外的には病欠という事になっていると分かったのは収穫だ。一瞬で言い訳を組み立て、愛想良く。

「今日は大体体調が良くなったので散歩に出てみたら、偶然藍池先生にお会いして。それでお誘いを受けたんですけど、まさか会長さんのお宅だったとは思いませんでした。ビックリです」

会長はそれを聞いて顔をしかめる。

「初対面の人に簡単について行くなんて軽率よ。それから外出時は制服を身につけるよう決まっています」

「……そうですね。ごめんなさい」

こういう時はとりあえず殊勝な態度をみせておくに限る。それが原因で悪い方に転ぶことは少なく、いつでも無理なく軌道修正できる良い定石だ。

「あと、御家族に行き先は伝えてきた？」

その言葉に一瞬ひやりとしたが。

違う。そういう意味ではない。別に家出の事実を知っているわけじゃない。

会長はただ、形骸化した校則の細目を並べ立てているだけだ。

「一応手紙を置いてきました」

嘘はついていない。実際の文面は「さがさないでください」であるが、そこは黙っておく。

「えー」

不満げなのはむしろ深池の方だ。

「睡蓮ちゃんはまだ高校生なのよ。町で買い食いもしたいし可愛い服も着たい、それに家族に対する秘密の一つや二つはあるもの

それなりに着飾って態度を改めるだけで、男子生徒の大半と女生徒の半分以上はコントロール可能はずだというのに。

文武両道にして真面目一徹。教師ですらほとんど知らない校則の隅々まで調べつくし、それをかたくなに守ろうと努め、他人にもそれを要求する彼女。南山晴蘭といえ、カタい・キツイの代名詞となりつつある。

最近少し柔らかくなって他人にはある程度寛容になってきたところはあるが、先ほどの発言だけをとってみても、母親のフリーダムさとは似ても似つかぬ生真面目女の部類に属するのは間違いない。

「それで、できれば私の代わりに母の話し相手になってくれると嬉しいわ」

「はい？」

「向いてないの、残念ながら。努力はしたんだけど」

お気楽で唐突な深池さんとおよそ冗談の通じない会長。いかにも性格のベクトル正反対だからストレスになりそうだ。それも一方的に。

しかも会長さんはそれを鬱陶しいと感じてしまう事に罪悪感を持っている模様。まったく難儀なことだ。

表向きの態度と中身が見事に独立した睡蓮にとっては、そういう類の不器用さは十分同情に値する。

「はい、私でよければ」

後々の面倒を避けるためにも、ここらへんで多少功德を積んでおくのも悪くないだろう。

なにせこの二人は睡蓮の正体を知っているのだから。丸め込む努力をしておくに越したことはない。

よ。セーラちゃんちょっと過保護過ぎ」

「高校生なんてまだまだ子供ですから」

と、会長はぼつさり切り捨てた。

「私たちは大人の管理下に置かれなければ自分では正しい判断が出来ない未熟な存在なんです。数々の危険や誘惑にあふれた盛り場などを自由にうろつかせていたら、たちまち悪の道への転落が待ちかまえています」

立場と発言が普通と逆転している。

「あと、私は晴蘭よ。自分でつけた名前を適当に崩さないでください」

「でもでも、うちでお茶を飲んでいってもらうぐらい構わないでしょ？ ね？ ね？」

「あまり特定の生徒と親しくするのは立場上好くないんですが……確かに家族に関する規定は無いわ。あくまでもお母さんの客という事で手を打ちましょう」

「うん、決まりね。やったー」

会長の許可を得て、深池はたちまちご機嫌になる。本当に子供のような人だ。

「念のため言っておくけど、貴女個人に対しては別に含むところはないから。規定の門限が六時半だから、もう少しゆっくりしていけるでしょう？」

会長は少女の方に向き直ると、そう言って能面のような表情を崩し、すこしだけ微笑んだ。

……本当に勿体ない。こうして近くで見るとよく分かる。

この会長が宗家の詩紀様に匹敵する大変な美人である事。あの劇の前から気づいていた人間は一体どのぐらい居たのだろうか。

「恩に着るわ。お願い」

そう。今さらだが、藍池美智緒こと南山深池と南山晴蘭は母娘である。

頭の回転は速い方だと自認している睡蓮にとっては、そこで一瞬であれ驚いてしまった事自体が腑に落ちない。

真実にたどり着くための材料はいくつもあったというのに。常日頃の自分であれば名字から二人の関係を連想できていても良さそうなものだ。

思い返せば会長は「よりにもよってあの」新川詩紀様とともに、『珠坂の女神』のダブル主役を文化祭の舞台で見事演じて見せている。彼女の態度が多少なりとも柔らかくなったのもちょうどその頃からだ。詳細な経緯については知るべくもないが、いかにも意味ありげではないか。

ではなぜ、二人が血縁である可能性に気づくことが出来なかったか。

少女は自問する。

簡単な。母娘の容姿には共通する要素がほとんど無い。

かつて『珠坂の女神』に関して世間の下世話な関心の的になったのは、作者の人生との一致だったそう。

本がベストセラーとなった直後、深池は夫に似ない娘を授かった。それが物語と同様に離婚の切っ掛けとなったというのは実に皮肉。

だが何のことはない。娘は父親だけでなく生みの母親にもまるで似ていないのだから、ドラマティックな裏事情を勘ぐるまでもなく、素直に隔世遺伝やら突然変異で説明するのが正しい。真実などそんなものだが、もたらされた結果は深刻だった。